

子育て支援研究センター年報

第16号 2026



宇都宮共和大学の地域社会連携・地域貢献ポリシー

宇都宮共和大学は、須賀学園の教育理念を踏まえ、大学の目的として、「時代の潮流と社会の要請を見極め、常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし、さらに経済、教育、文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする」（学則第1条）と定めている。

宇都宮共和大学は、栃木県内に3つのキャンパスと活動拠点を有しており、学園の100年を超える伝統を生かしながら、絶えず「まち」、「ひと」に視点を当て栃木県央を中心とする北関東圏の「地域社会」の経済、教育、文化の向上と発展のために貢献することを目的とする大学である。

この目的を達成するために、本学は、「社会連携・社会貢献に関する方針」を次の通り定める。

1. 目的と使命

本学は、地域社会と連携し、時代の要請に応え、将来地元で地域社会の発展に貢献し、活躍できる人材を養成することに努める。

2. 産学官の連携

本学は、企業、自治体、各種団体・組織、市民等と積極的に連携し、地域社会の発展に貢献できるように努める。

3. 地域活動の拠点

本学は、本学の有する教育・研究資源を積極的に地域社会へ提供し、地域の教育・文化活動の拠点となるよう努める。

4. 地域貢献活動への支援

本学は、教職員・学生が、研究・教育の成果を地域社会に発信する活動及び教職員・学生が地域の活動や行政施策の助言者等として参画することを積極的に支援する。教職員は、「宇都宮共和大学コンプライアンス規程」の重要性を認識し、高い倫理観を持って行動する。

（平成29年11月1日制定）

子育て支援研究センター年報 第16号 2026

目 次

I. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育 実践報告	1
II. T i n y（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告	7
III. 「親子遊びの会」－子育てネットワークづくりプロジェクト－ 実践報告	19
IV. 子育て支援研究センター2025年度公開講座	25
公開講座の概要	25
V. 地域産学官連携活動報告	26
1. 自然遊びの会・行事实践報告 ～親子ふれあいネイチャー事業～	26
2. 宇都宮市環境学習センター事業の実施	31
3. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」報告	36
1. 「自然を感じよう～トピアリー作り」	36
2. 「つくって遊ぼう～しくみを楽しむおもちゃづくり～」	37
3. 「親子リトミック」	39
4. 「忍者になって修行でござる！」～親子で楽しむ運動遊び～	42
VI. 宇都宮共和大学子ども生活学部卒業研究	44
1. 2025年度卒業研究題目一覧	44
2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会第39回学生研究発表報告	46

資 料

I. 2025（令和7）年度子育て支援研究センター事業報告	53
II. 2025（令和7）年度子ども生活学部専任教員の社会貢献活動	57
III. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程	61
IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領	63

I. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告

子ども生活学部 教授 市川 舞

1 はじめに

子ども生活学部の開設以来、地域の就学前施設との交流保育を授業に位置づけ、実践している。本学の森やグラウンド、アリーナなど校地の環境を活かした来校型の交流保育に加え、訪問型の交流保育を行い、授業を通して子どもと出会い、子どもや保育者の姿から学ぶことができるこの取り組みは、本学の保育者養成教育の特色の1つである。本稿では、令和7年度の取り組みについて報告する。

2 令和7年度の交流保育実績

令和7年度の活動の実績を表1に示す。今年度は、宇都宮市内およびさくら市の就学前施設7園と連携し、本学部の1年生から4年生までの学生が、のべ21回の交流保育を実施した。

表1 令和7（2025）年度 交流保育計画

1. 校地（子どもの森、アリーナなど）を活用した交流保育（交流した学生：1年生）

- (1) 連携園：認定しらゆりこども園 岩本春枝園長（宇都宮市若草4-13-12）
 - 1) 関連授業：フィールドワークⅠ、保育内容総合演習Ⅰ、
保育原理、保育内容総論（子ども生活学部1年38名）
 - 2) 授業担当教員：桂木、市川、小野
 - 3) 日程：① 2025.6.11（水）年中児81名 テーマ：春の自然に親しむ→雨天のためアリーナ
② 2025.11.12（水）年中児81名 テーマ：秋の自然に親しむ
③ 2026.1.28（水）年中児81名 テーマ：いろいろな遊びを楽しもう

- (2) 連携園：つるた保育園 徳原省市園長
 - 1) 関連授業：フィールドワークⅠ、保育内容総合演習Ⅰ、
保育原理、保育内容総論（子ども生活学部1年38名）
 - 2) 授業主担当：桂木、市川、小野
 - 3) 日程：① 2026.1.15（木）3歳児36名
② 2026.1.16（金）4歳児36名
③ 2026.1.26（月）5歳児36名

2. 校地（子どもの森、アリーナなど）を活用した交流保育（交流した学生：2年生）

- (1) 連携園：認定みどりこども園 岩本眞砂枝園長（宇都宮市西原）
 - 1) 関連授業：保育内容総合演習Ⅱ、保育内容健康、保育内容環境
 - 2) 授業担当教員：月橋、新井、小野、霜触、桂木
 - 3) 日程 ① 2025.5.28（水）年少45名 グランド（雨天時はアリーナ）
② 2025.6.4（水）年中36名 グランド（雨天時はアリーナ）
③ 2025.6.18（水）年長43名 森の探索（雨天時はアリーナ）

3. 訪問型交流保育（交流した学生：4年生）

- (1) 連携園：認定みどりこども園 岩本眞砂枝園長（宇都宮市西原町3335-2）
- 1) 関連授業：関連授業：保育内容総合演習Ⅳ（子ども生活学部4年生40名）
- 2) 授業担当教員：市川、桂木、月橋、小野
- 3) 日程：① 2025.5.1（木）年長児47名、年中児47名
② 2025.5.7（水）年長児47名、年中児47名

- (2) 連携園：風とみどりの認定こども園 熊倉仁園長（宇都宮市下栗631-2）
- 1) 関連授業：保育内容総合演習Ⅳ（子ども生活学部4年生40名）
- 2) 授業担当教員：市川、桂木、月橋、小野
- 3) 日程：① 2025.5.1（木）年長児82名、年中児60名
② 2025.5.7（水）年長児82名、年中児60名

4. 訪問型交流保育（交流した学生：3年生）

- (1) 連携園：認定こども園釜井台幼稚園 山崎英明園長（宇都宮市下岡本町4548-4）
- 1) 関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（子ども生活学部4年生53名）
- 2) 授業担当教員：市川、桂木、月橋、小野
- 3) 日程：① 2026.1.14（水）1歳児～4歳児クラス 197名 ※5歳児は園外保育
② 2026.1.21（水）1歳児～5歳児クラス 296名

- (2) 連携園：つながるほいくえん釜井台 人見博子園長（宇都宮市下岡本町4548-4）
- 1) 関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（子ども生活学部4年生53名）
- 2) 授業担当教員：市川、桂木、月橋、小野
- 3) 日程：① 2026.1.14（水）0歳児～5歳児クラス 92名
② 2026.1.21（水）0歳児～5歳児クラス 92名

- (3) 連携園：つながるほいくえん御幸ヶ原 小森孝子園長（宇都宮市御幸ヶ原町75）
- 1) 関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（子ども生活学部4年生53名）
- 2) 授業担当教員：市川、桂木、月橋、小野
- 3) 日程：① 2026.1.14（水）0歳児～5歳児クラス 101名
② 2026.1.21（水）0歳児～5歳児クラス 101名

- (4) 連携園：認定こども園氏家幼稚園 中山早苗園長（さくら市櫻野1745）
- 1) 関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（子ども生活学部4年生53名）
- 2) 授業担当教員：市川、桂木、月橋、小野
- 3) 日程：① 2026.1.14（水）3歳児～5歳児クラス 302名
② 2026.1.21（水）3歳児～5歳児クラス 302名
-

3 校地（子どもの森、アリーナなど）を活用した交流保育

校地を生かした交流保育（表1の1および2）では、3園が来校、子ども生活学部1年生（38名）および2年生の学生（38名）が交流した。

1年生の学生は、2園との交流保育を経験した。認定しらゆりこども園は、4歳児クラスが年3回、園外保育として来校し、4歳児の一年間の発達過程を感じることが出来た。事前学習や森の整備を「フィールドワークⅠ」の授業で、交流保育の実践および振り返りを「保育原理」「保育内容総論」「保育内容総合演習Ⅰ」の各授業で行い、科目間連携による学習の充実を図った。具体的には、アリーナで巧技台やフープや縄を用いて体を動かして遊ぶ活動や「こどもの森」の

探索を行った。

つるた保育園は、1月に3週にわたり3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスが来校し、子ども生活学部1年生の学生（38名）とグラウンドでしっぽ取りやボール遊び、風あげなど体を動かす遊びを楽しんだ。事前学習を授業科目「フィールドワークⅠ」で、交流保育の実践および振り返りを授業科目「保育内容総合演習Ⅰ」「保育内容総論」で行った。短期間で3歳児・4歳児・5歳児クラスの子どもと出会い、幼児期の発達過程をダイナミックに感じとり、授業で学んだ幼児期の発達過程や保育内容の読み取りを、実践を通して改めて確認し、理解を深める機会となった。

学生からは「子どもと関わることができてうれしかった」「子どもたちはとてもアクティブでやりたいことをどんどん見つけていた」「子どもの体力がすごかった。自分も体力をつけなければと思った」「子どものことについてみんなで発表しあうことで、色々な発見があった」などの声が寄せられた。

また、2年生の学生は、5月から6月にかけて認定みどりこども園の3歳児クラス・4歳児クラス・5歳児クラスの子どもたちと交流保育を実施した。3歳児および4歳児においては、授業科目「保育内容健康」および「保育内容表現」を活用し、アリーナで体操やかけっこ、パラバルーンなど体を動かす活動に参加し、子どもが体を動かすことや自己表現を楽しむ姿に出会った。また、5歳児との交流では、「保育内容環境」の授業を活かし、森の探索を行い、子どもが自然を感じ取り、興味・関心を広げ、主体的に環境に関わろうとする姿を観察することができた。

このように、2年生の交流保育は、「保育内容」各論で学修した内容を実践的に統合する機会となった。学生からは「子どもの発達によって走り方など体の動かし方が全く違うことが分かった。体を動かして楽しむことは走ったりすることだけではなく、パラバルーンなどの表現や日常生活の中でも楽しんでいるのだと感じた。」「子どもは森のなかで興味津々で『もっと触りたい』『見つけたい気持ち』がうずうずしてくることがわかった。そのためにはじっくり探索する時間も大切な援助だと学んだ」などの声が寄せられた。

学生は、交流保育の中で出会った子どもの姿を、保育内容の視点から捉え直すことで理解を深めるとともに、保育内容をより豊かに展開するための指導法について考察する契機を得ることができた。



写真1 縄で引っ張りっこ



写真2 どんぐりのあかちゃん



写真3 一緒にパラバルーン



写真4 森の探検



写真5 つかまえてごらん！



写真6 風あげしよう

4 訪問型の交流保育（4年生）

4年生の学生を対象に訪問型の交流保育を行った（表1の3（1）（2））。対象は授業科目「保育内容総合演習Ⅳ」を履修する学生であり、5月初旬に認定みどりこども園および風と緑の認定こども園の2園を訪問し、保育助手体験を行った。

4年生は、これまでに計4回の教育・保育実習を経験しており、直近では3年次11月に保育実習Ⅱ・Ⅲを履修している。さらに、3年次1月には訪問型交流保育として認定こども園および保育所を訪問している。これらの実習および交流経験において学生が主に出会ってきた子どもの姿は、年間保育計画の後半期にあたり、クラスとしての生活が充実し、集団としてのまとまりが形成されている時期のものであった。これに対し、本実践で学生が出会ったのは、進級直後である5月初旬の子どもたちである。この時期は、新入園児および進級児が新たな担任保育者や環境に適応しつつ、徐々に安心感を獲得しながら自己を表出し、他者や環境に関わろうとする過程にある。本交流では、このように時期によって異なる子どもの姿に着目し、環境構成および保育者の援助のあり方を実践的に学ぶことを目的として計画した。

学生からは「同じ4歳児でも1月の4歳と5月の4歳とでは大きく違うことが分かった」「自分の好きな遊びを子ども自らみつけられるように、安心してじっくりできるように先生方は環境構成していることが分かった。『環境を通して行う』のイメージを具体的に感じる事が出来た」などの感想が寄せられた。

学生は、個々の子どもの安心感・安定感を基盤とした関わりの重要性を理解するとともに、子どもが環境に自己をひらき、興味・関心に基づいて遊びを見出していく過程や、集団形成の初期における保育の在り方について学ぶ機会を得た。



写真7 声とフリをあわせて



写真8 偶発的な出会いが子どもを繋ぐ

5 訪問型の交流保育（3年生）

「保育内容総合演習Ⅲ」を履修する3年生を対象に交流保育を実践した（表1の4（1）、（2）、（3）（4））。具体的には、認定こども園釜井台幼稚園、つながるほいくえん釜井台、つながるほいくえん御幸ヶ原、認定こども園氏家幼稚園の4園において保育助手体験を行った。

学生は、それぞれ2日程で4園中2園の連携園で保育助手体験をさせていただくよう配属した。事前に各園の保育理念や保育目標を学習し、それぞれの園の保育理念がどのように日々の保育実践と結びついているのか、考察した。学生からは、「これまでの実習では、実習をすることに集中して気づけなかったことがたくさんあったことに気付いた。各園が『大切にしていること』に改めて注目することで、それぞれの園のよさに改めて気が付くことができた」「実習はいつも一人で行くが、この授業では同級生とみんなで一緒に保育助手を体験できたので、振り返りの話し合いが具体的にできてよかった」などの声が聞かれた。

さらに、認定こども園釜井台幼稚園および認定こども園氏家幼稚園の2園においては、2週にわたり教材提案型の交流保育を実践させていただいた。冬の季節に親しみたい素材として「毛糸」に着目し、タッセルづくりの活動を計画した。教育課程に基づく保育終了後の時間に、学生が保育室に環境構成をさせていただいた上で実践した。活動においては、子どもが異なる色や質感の毛糸を選ぶ、束ねる、結ぶといった操作を通して、自分なりの表現としてタッセルを制作する過程を重視した。2週にわたって継続して活動を行ったことにより、2週目には自らのつくりたいイメージをより明確にもって活動に参加する子どもの姿や、結ぶ技能が徐々に洗練されていく子どもの姿が見られ、継続的な素材との関わりが子どもの表現の深化や技能の向上に寄与する様子を間近に学ぶことができた。このように、学生は、一人一人の子どもの発達や興味・関心に応じた援助を行いながら、素材との関わりを通じた活動の展開について実践的に学ぶことができた。また、子どもの主体性を尊重しつつ、活動が深まるよう環境を構成することの重要性や、適切な関わりの在り方について理解を深める機会となった。学生からは「つくる系の責任実習をしたことがなかったので、教材をどのように準備するか、どのように配置するかなど、環境構成次第で

子どもの活動の質が変わることに気が付いた。」「結ぶことがはじめは難しかった子どもも、教えてあげるのではなく、隣で一緒に何度も結んでみることで、少しずつできるようになっていくことが分かった。自分で繰り返しやることが大切だと感じた」などの声が聞かれた。



写真9 作り方を伝える



写真10 一緒に作ろう

6 おわりに

今年度も校地を活かした来校型の交流保育に加え、訪問型の交流保育を試みた。1年次から4年次まで、科目間連携や教員間の連携の下、段階的な交流保育の展開を通して、学生が子どもの発達過程を理解し、保育実践力を体系的に深めることを目的として実施した。

1年次では、複数園との継続的・集中的な交流を通して幼児期の発達過程を実感的に捉え、科目間連携によって学習を統合することを意図した。2年次では、保育内容各論での学びを基盤に、子どもの姿を具体的に読み取り、実践と理論の往還を通して理解を深めた。3年次では、保育助手体験および教材提案型の実践により、環境構成や援助の在り方を主体的に構想・実践する経験を得ることができた。さらに4年次では、時期の異なる子どもの発達の姿に着目した訪問型交流を通して、子どもの安心感を基盤とした関わりや集団形成過程に対する理解を一層深めた。

以上のことから、本取組では、学年に応じた実践機会の設定と科目間連携により、学生が子どもの発達や保育内容を多面的に捉え、理論と実践を往還しながら学びを深化させる教育的効果を得ることができたのではないかと考えられる。一方で、課題としては、各実践における学びの連続性をより明確に位置付けるカリキュラム上の整理や、学生一人一人の学びの到達度を可視化・評価する仕組みの充実が求められよう。今後は、これらの課題を踏まえ、より体系的かつ発展的な地域連携型の保育者養成教育の構築を目指していきたい。

謝辞

交流保育にご協力くださいました、認定みどりこども園、認定しらゆりこども園、認定こども園釜井台幼稚園、つながるほいくえん釜井台、つながるほいくえん御幸ヶ原、風と緑の認定こども園、つるた保育園、認定こども園氏家幼稚園のみなさまに深く感謝申し上げます。

Ⅱ. Tiny（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告

子ども生活学部 准教授 大島 美知恵

1. はじめに

Tinyの活動は今年で14年目を迎えた。障がいの有無にかかわらず、子どもたちが安心して遊べる場として、学生・教員・保護者や施設職員・子どもが関わり合うことで、子どもたちの発達を支える場となることを願い、活動を続けてきた。

今年度の「あそびの集い」では、コロナ以降自粛していた「おやつタイム」を再開し、従来に近い形での開催が可能となった。またファミリーコンサートでは7年前にご出演いただいた「Ciel」のお二人を再びお迎えしたことで、これまでのコンサートを振り返る機会にもなった。

以下に今年度の各活動について報告する。

2. 「あそびの集い」

(1) 第52回「あそびの集い」の実践

今回の「あそびの集い」は、連休の中日にあたったことや、日曜日の為、施設でまとまったの参加が叶わず、参加者はやや少なめであったが、そのぶん一人ひとりの子どもたちと丁寧に向き合える、あたたかな会となった。最初は少し緊張していた子どもたちも、会場に並んだサーキットやコーナー遊びに自然と目を向け、次第に興味を示し始めた。学生たちとのやりとりを通して徐々に表情がやわらぎ、活動の中で笑顔が増えていく様子が印象的であった。

●活動の概略

1. 日 時：7月20日（日）10時00分～11時45分
2. 場 所：宇都宮共和大学5号館4階 保育実習室
3. 内 容：パネルシアター、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流
4. 参 加 者：障害のある乳幼児・児童とご家族（子ども7名、大人8名）
5. 参加学生：子ども生活学部4年生9名、3年生4名、2年生9名、1年生1名
計23名

●実施までの準備

準備の方法は昨年と同様に、学生たちが学年の垣根を越えて積極的に協力し合い、各グループでコーナー遊びの企画や材料の準備を進めた。限られた時間の中でも、子どもたちが安心して楽しめるよう工夫を凝らす姿が多く見られ、上級生が下級生にアドバイスをを行うなど、自然と良い学び合いの場となっていた。

またサーキットに使用する道具をどのような順序で並べるのか、使用方法をどう説明するのかなどの意見が多く交わされ、学生達が「安全に楽しく遊んで欲しい」と願う気持ちも表れていた。

●当日の活動の様子

当日は、子どもたちが各々のペースで遊べるサーキットやコーナー遊びを取り入れたことで、子どもたちが自分のペースで取り組める環境が整い、緊張していた表情もいつの間にかのびのび

とした動きへと変わっていった。特にサーキットの遊びでは学生と自然に交流が生まれ、会場全体に和やかな空気が広がっていた。中でも学生がSNSから情報を得て、布団圧縮袋の中に水を入れて制作した「水マット」は、どのような障がいのある児にも受け入れられやすく、上に乗って転がったり、手で触ったり、様々な表現が導きだされ、人気の高い活動であった。

参加人数が少なかったことで、全体的な進行もゆったりとしたテンポで進めることができ、子どもたちは無理なく楽しめる時間を過ごし、保護者にとっても安心して見守れる場となった。家ではついつい怒ってしまうが、ここでは落ち着いて子どもを見ることができるという保護者同士の会話があり、それを聞いた学生は、この活動の意義を改めて感じたと話していた。

また今回からおやつタイムを復活したことで、なかなか子ども達の元へ入っていけなかった学生も「おやつを配る」というはっきりとした役割から、子どもとの接点を得られていた。

終了後の振り返りミーティングでは、3・4年生の子どもとの関わり方から学びがあったという1・2年生の意見が多く、学生同士の成長を実感できる機会となった。

終了後に実施した保護者アンケートでは、すべての参加者から「とても楽しかった」「次回も参加したい」との声が寄せられ、活動の満足度の高さが感じられた。参加者・学生双方にとって有意義であり、多くの学びが得られるプロセスであったと考えられ、次につながる会となった。

表1. 第52回ふれあいTiny隊の活動プロトコル

項目・目的	使用曲	使用楽器	活動内容
1. 始まりの認識 ・活動、場面の切り替え ※アセスメント	手をつないでこんにちは	タンブリン	歌いながら対象者に名前を呼びかけタンブリンを鳴らしてもらう
2. 楽器活動 ・注視 ・自己表現 ・コミュニケーション	うみ	ファイルオーシャン	・小さな音で伴奏し、楽器を配付する ・音を聞いて自由に鳴らす ・音楽に合わせて楽器を鳴らす
3. 身体活動 ・ボディイメージ ・固有感覚	バナナの親子	音源	音楽に合わせて体を動かす
4. サーキット ・自己選択 ・順守			・水マット：乗ったり、転がったりして感触を楽しむ。 ・ドレミパット：歩いて音を出す ・ロッカーボード：揺れを楽しむ ・コーナーマット：上る、下りる
5. コーナー遊び ・自己選択 ・自己表現 ・コミュニケーション			・トイレットペーパー芯を使用した遊び ・キッチンペーパーと水のお絵描き ・壁面：小さな用紙に書いた絵を壁に張った模造紙に貼り付ける ・金魚・魚釣り：マグネットを利用したもの
おやつタイム			
6. 視覚活動 ・場面の切り替え ・注視 ・発語	誰かがきたよ	シルエット ペープサート (海Ver)	歌に合わせてペープサートを動かして、子どもたちと関わりをもつ。

7. 鑑賞 ・鎮静 ・集中	アンダー・ザ・シー ホール・ニュー・ ワールド	ピアノ連弾 (歌)	ピアノ連弾の演奏を鑑賞する。 ホールニューワールドは歌も鑑賞する。
8. 歌唱 ・共有感・一体感を味わう	あおきいろ	ピアノ	ピアノの伴奏に合わせて皆で歌う。
9. 終わりの歌 ・終わりの認識 ・鎮静	さよなら	エナジーチャ イム	学生が鳴らした音を、一人ずつ指で押 さえて消してもらう



写真1. サーキット「水マット」



写真2. サーキット「ミュージックパッド」



写真3. コーナー遊び「トイレットペーパー芯」



写真4. コーナー遊び「壁面：ひまわり」

(2) 第53回「あそびの集い」の実践

今回は「冬でもほかほか！季節を感じてたのしもう！」をテーマに、雪や鬼をモチーフとしたコーナー遊び、体があたたまる体操、歌や楽器の活動など、冬の季節感を楽しめる多彩なプログラムを実施した。地域の障がいのある子どもをもつ親子に加え、児童発達支援や放課後等デイサービスからの参加もあり、計21名の子どもたちが元気いっぱい活動し、会場は終始にぎやかで温かい雰囲気に包まれた。

●活動の概略

1. 日時：2月7日（土）10時00分～11時45分
2. 場所：宇都宮共和大学5号館4階 保育実習室
3. 内容：パネルシアター、制作活動、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流

4. 参 加 者：地域に在住する障がいのある乳幼児・児童とその家族
地域の子童発達支援・放課後等デイサービスの利用者と職員
(子ども21名 大人13名 計34名)

5. 参加学生：子ども生活学部4年生8名、3年生6名、1年生1名 計15名

●実施までの準備

学生たちは毎週木曜日の昼休みにミーティングを行い、プログラムの内容や役割分担について話し合いを重ねてきた。開催前日には遅くまで残り、コーナー遊びの制作、楽器の練習、当日の進行確認など、細部に至るまで準備を進めていた。特に今回は季節柄「雪玉」を使用することが多く、素材は柔らかく人に当たっても痛くないもの、子ども達が持ちやすい大きさ、楽しめる個数はどのくらい用意すれば良いのかなどを吟味した。また「おっかけ玉入れ」では段ボール箱に集まった雪玉を床にばらまく役割があったが、どのように雪玉をまくと子どもたちに安全に楽しさを与えられるかについて、学生たちが意見を出し合い、何度も繰り返し練習する姿がみられた。

2年生は実習期間のため当日の参加は叶わなかったものの、制作が得意な学生が多く、「おっかけ玉入れ」に使用する段ボールの飾り付けや教材作りなどに大きく貢献した。

●当日の活動の様子

当日は、準備した遊びが子どもたちの関心を引き、活動の中で生き生きとした表情が次々と見られた。

体があたたまる体操ではリズムに合わせて体を動かし、楽器活動では季節を感じる曲をみんなで楽しむなど、冬ならではのプログラムが盛り上がりを見せた。学生と子どもたちの自然な関わりが随所に生まれ、会場全体が一体感に包まれるひとときとなった。また学生たちは当日の進行に向けて分担は決めていたものの、それにとどまらず、「今、自分にできることは何か」を自ら考え、必要な動きをその場で見つけて行動していた。

保護者・職員アンケートでは、どの活動が一番楽しかったかを問う質問があるが、今回は「さまざまな活動が楽しかった」「全部」という声が多く寄せられ、多彩なプログラムが好評であった。また学生の対応についても「とても良かった」との高い評価が得られた。

また施設の職員が、以前にも参加したことのあるお子さんの様子を見ながら「前は部屋に入るのも難しかったけれど、今回は自然に部屋へ入れましたね。毎日見ていると気づきにくいですが、とても成長していることを感じることができました」と話してくださり、筆者も「そうでしたね。本当に成長しましたね」と答え、共に当時を振り返る場面があった。このように「あそびの集い」は保護者・職員と共に学生や教員も子どもの成長を見届ける場になっていることが実感できた。

また今回は4年生にとって最後のT i n yの活動であったこともあり、終了後のミーティングでは、これまでの経験から学んだことや後輩へのメッセージが語られ、温かな時間が共有された。

活動を通して子ども・保護者や職員・学生のすべてにとって有意義な時間となり、充実した会となった。

表2. 第53回あそびの集いの活動プロトコル

目的	使用曲	使用楽器	活動内容
1. 始まりの認識 ・活動、場面の切り替え ※アセスメント	手をつないでこんにちは	タンブリン	歌いながら対象者に名前を呼びかけタンブリンを鳴らしてもらう
2. 楽器活動 ・音色を楽しむ ・遅速を感じる	ゆき	鈴 つな鈴	様々な鈴を鳴らして楽しむ 円座になり、全員でつな鈴を鳴らす
3. おっかけ玉入れ ・空間認識 ・注視・追視 ・コミュニケーション			手芸綿と排水溝ネットで作した雪玉を、学生が動かす段ボールの中に入れる。
4. 身体活動 ・注視 ・発散	ラーメン体操		学生のモデリングに合わせて、体操する
5. パネルシアター ・注視・追視	こんこんくしゃん		パネルシアターを鑑賞する。 歌える参加者には一緒に歌ってもらう
6. コーナー遊び ・自己選択 ・コミュニケーション			鬼あて：段ボールの鬼の口の中にボールを入れる でんでん太鼓：でんでん太鼓を製作する 雪玉すくい：手作りの雪玉をお玉やトングなどを利用してすくい、別の容器へ移す 福笑い：目・鼻など顔のパーツを並べる
おやつタイム			
7. 視覚活動 ・注視・発語	誰かがきたよ (ディズニーVer)	ペプサート	歌に合わせてペプサートを動かし、子ども達がシルエットを当てる。
8. 鑑賞（トーンチャイム）	君をのせて	トーンチャイム	トーンチャイムの演奏を聴く
9. 歌唱 ・共有や一体感を味わう	ありがとうの花 (振りつき) 手のひらを太陽に	ピアノ	歌を鑑賞する。 皆で歌う。
10. 終わりの認識 ・鎮静 ・状況の切り替え	さよなら	エナジーチャイム	一人ひとりエナジーチャイムを指で押さえ、音を消してもらう



写真5. 追っかけ玉入れ 練習風景



写真6. 楽器活動「鈴」♪ゆき



写真7. 身体活動「ラーメン体操」



写真8. パネルシアター「こんこんくしゃん」

3. Tinyファミリーコンサート

～障がいがあってもなくても子どもからおとなまでみんなが楽しい音楽のつどい～

Tinyファミリーコンサートは今回で第13回を迎えた。昨年に引き続き、ダウン症協会栃木支部つくしの会のご協力を得て、サン・アビリティーズにて「Ciel」のお二人をお迎えしての開催となった。

(1) 開催までの道のり

昨年度に引き続き、宇都宮市サン・アビリティーズ体育館をお借りして開催した。サン・アビリティーズは障がいのある人の教養・文化および体育の向上を図り、社会参加を促進するための施設であるため、障がいのある方が利用しやすい設備が整っており、参加者の出入りなどもスムーズで運営しやすい場所である。会場を借りるにあたっては、ダウン症協会栃木支部の饗庭様に会場との交渉等々ご協力を頂いた。

「Ciel」はバイオリンの浅沼杏花さんとピアノ・キーボードの石川陽亮さんのご夫婦のユニットで、息の合った華やかな演奏と嗜好を凝らしたパフォーマンスが魅力で、7年前にもファミリーコンサートにご出演してくださっている。またピアノが無い場所でも、屋外でも、音響設備一式を持参され、幅広い場所でご活躍されていることから、今回も体育館という音響的には難しい場所でも、心地よく響く音色で演奏してくださった。また音が苦手な方も多い為、最初は小さめで少しずつ音量を上げていくというオーダーにもご対応くださり、障がいのある方にも参加しやすい環境に配慮することができた。

学生たちは、本番に向けてミーティングを重ね、役割分担に基づき準備を進めた。昨年度は10月開催であったため、3年生は実習を控え、当日参加できないメンバーもいたが、今回は全ての学年が参加することができた。またドラムサークル（手作り楽器を参加者全員に配付しての即興演奏）で使用するドラムの修繕やチラシ作り、出演者への手作りの花束の準備などを学生がアイデアを出し、教員も協力しながら行った。



図1. 第13回Tinyファミリーコンサートのチラシ

(2) コンサート当日の様子

●催しの概略

1. 日 時：2025年11月24日（月・祝）13時30分～15時00分
2. 場 所：サン・アビリティーズ
3. 内 容：Cielによるバイオリンとキーボードのコンサート
4. 参加者：障がいの有無にかかわらず乳児から高齢者までどなたでも
（一般参加者は65名）
5. ボランティアスタッフ：子ども生活学部：4年生5名、3年生5名、2年生7名、
1年生1名 計18名

●当日の活動の様子

今回は事前参加申し込みは多かったものの、インフルエンザの流行もあり、キャンセルが相次ぎ65名の参加であった。しかし、T i n yの「あそびの集い」に参加して下さっている方々を始め、乳児から高齢者まで幅広い年齢層の方々、また、自力で動くことが難しい方、自閉症やダウン症の方なども含め多様な方々の参加があった。

学生たちは朝早くから集まり、会場の清掃、受付の設営等々、開始に向けて準備を行った。また、出演者の方が到着してからは、指示をいただきながら椅子の配置を行った。昨年度はこの会場に来るのが初めての学生も多く、またワークショップという形式も初めての経験だったことから、時間がかかっていたが、今回は昨年度のコンサートの経験者も多く、スムーズに配置することができた。更に席への出入りのスムーズさ、出演者が全ての席から良く見えるようにするにはどうすれば良いかなど、より快適に参加者に過ごしてもらえよう、学生たちが意見を出し合いながら、自主的に何度も並べ方を変更している姿が見られた。またダウン症協会の饗庭様には、現地入りしてから気づいた不足の物を全て手配してくださるなど、並々ならぬご助力をいただいた。また毎回恒例の学生のドラムサークルと出演者とのコラボ演奏のリハーサルでは、入退場の部分までCielのお二人からアドバイスを頂き、プロの演出に触れる貴重な機会を得られた。

今回の新たな試みとしては、過去にもご出演下さった「Ciel」のお二人をお迎えしたこともあり、これまでのファミリーコンサートとあそびの集いの写真を会場後方に展示した。初めての活動に参加した人には我々の活動をより深く知っていただくことになり、毎年のように参加されている方には懐かしく振り返るきっかけとなった。Cielのお二人も7年前の出演時の写真を懐かしく御覧になられていた。

演奏が始まるとCielのお二人の素晴らしい音楽と楽しいパフォーマンスに参加者は直ぐに引き込まれ、笑顔の絶えないコンサートとなった。思わず席を立てて拍手をしたり、演奏者の問いかけに大きな声で応えたり、思い思いの表現で楽しまれている姿が見られた。一方、聴覚過敏で会場で聞くことが困難であった参加者も、隣の静養室を利用して最後まで鑑賞することができていた。

休憩後にはCielのお二人から演出指導を受けた学生たちがドラムサークルで参加者を盛り上げ、会場一体となってドラム演奏を楽しんだ。一体感がありつつも、それぞれの表現を楽しむことのできるドラムサークルは今回も好評で、後半のプログラムへとつなぐことができた。子どもも大人も最後まで飽きることなく楽しみ、惜しまれつつ終了となった。

学生たちは終了後も参加者の見送り、会場の片付け等々を担い、最後はCielのお二人と写真撮影をし、無事に終了した。

そして、今回は学生たちの施設実習先の先生方も参加して下さっており、「とても良い取り組みで、もっともっと多くの方に知っていただきたいですね。」とのお言葉を頂いた。



写真9. Cielの演奏とパフォーマンス



写真10. ドラムサークル



写真11. 出演者を囲んで、Tiny隊メンバーと共に出演者Cielと学生たち

(3) 参加者対象の事後アンケート結果

コンサート終了後に参加者アンケートを実施した。過去にグーグルフォームの導入で回答率が下がった為、一昨年からグーグルフォームと紙面のどちらか選んで回答できるようにしており、アンケートのアナウンスをもしっかりと行い、回答時間を確保する工夫も行ったが、例年同様回答率は30%ほどであった。やはり紙面のみのアンケートの方が回答率は高くなる傾向にあるようだ。

コンサートの内容については高評価を得られた。子どもも大人も楽しめる選曲と構成であったこと、子どもをひきつける楽しい演出だったこと、ドラムサークルの参加型の時間があったことなどが理由に挙がっていた。

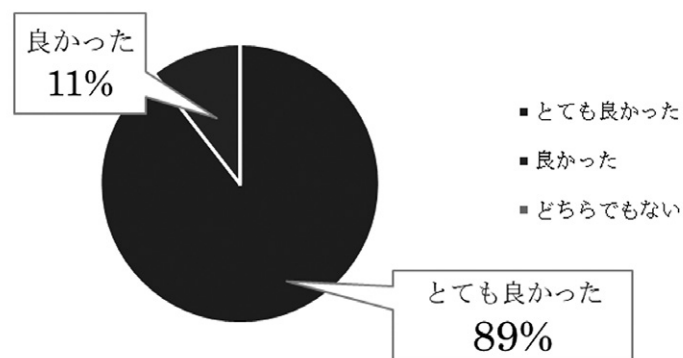
コンサートを知った情報源は、ダウン症協会からのお知らせ、これまでにお世話になってきている様々な関係者や関係団体があがっていたが、今回は学生たちのアルバイト先のチラシを見て参加してくださっている方もおり、学生たちが学内外で活動を支えている一面を見ることができた。

スタッフや学生ボランティアについては、昨年度は慣れない会場で1年生が多かったこともあ

り、もう少し積極的に子ども達と関わって欲しいという意見があったが、今回は高評価を頂いた。中には「去年は、参加者と学生さんとの間に、距離を感じましたが、今回は、スッと子どもたちの側に寄り添って、その様子をよく察知して活動されていたように思います。接し方がとても良かったと思いました。」とのコメントがあり、継続して学生たちの姿を見守ってくださっていることが分かる。このことから、Tinyは地域貢献活動として行っているが、学生たちが地域に貢献することを学ぶだけでなく、地域の皆様に見守られながら学生達が成長していることを実感できた。

今回の参加申し込み状況から得られた気づきを、補足としてここに記しておきたい。対象となる子どもの申し込みは放課後等デイサービスなどの施設からが大半であった。一方、障がいのある成人の参加申し込みが子どもよりも上回っていた。児童領域は放課後等デイ等により余暇支援が手厚くなってきているのに対し、成人の領域の余暇支援が求められている社会的背景が推察される。施設実習では成人の施設に配属になる学生もいることや、障がいのある子どもたちの将来を見据えた支援を考える上でも、成人を対象とした「あそびの集い」の開催は検討の余地があるといえる。

1. 本日のコンサートはいかがでしたか？19件の回答



2. 1の回答の理由・感想など（自由記述）

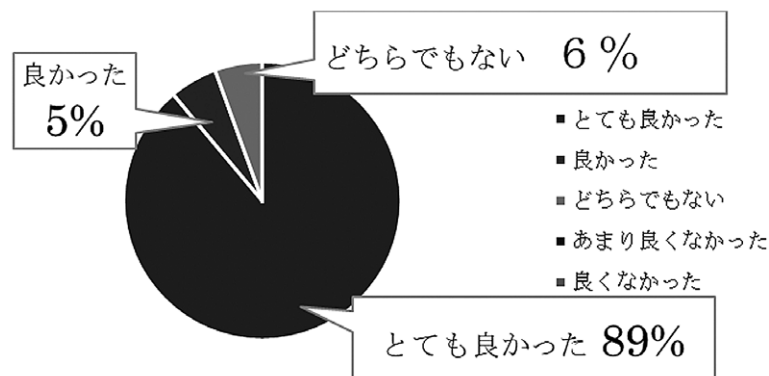
- ・子供が参加できるコーナーがあって良かった。
- ・子供をひきつける楽しい演出と子供も大人も楽しめる曲の構成で、家族共々、とても楽しめました。ピアノもバイオリンの演奏もとても素晴らしかったです！
- ・子どもたちが大喜びでした！普段、あまり生の演奏を聴く機会がないのでとても新鮮でした！
- ・お子様たちが制限なくのびのびと楽しいことを表現できていたこと。
- ・楽しい生演奏。選曲も良かったです。
- ・知っている曲ばかりで、聴きやすかった。学生さんの手作りの太鼓を娘はとても気に入り、喜んで演奏していました。
- ・楽しくて面白かった
- ・バイオリンの音色とお兄さんのびっくりパフォーマンスに目がくぎ付けでした。
- ・みんなでドラムやマラカスを演奏したのが楽しかった。

- ・学生スタッフさんの愛嬌があり、丁寧に対応してくださり安心でした。子どもが好きなのが伝わってきます。
- ・毎年楽しみにしております。ありがとうございました。

3. このコンサートを何でお知りになりましたか。

- ・YAMAHA音楽教室（学生アルバイト先）にあったチラシ
- ・エミオスプラスさんから教えて頂きました。
- ・以前、イベントに参加させて頂いた事があり、今回も声を掛けて頂きました。
- ・チラシ
- ・ダウン症協会
- ・共和大学生アルバイトスタッフからのお知らせ
- ・共和大学教員から
- ・通所施設から
- ・友人から

4. スタッフや学生ボランティアの対応についてかがでしたか？



5. その他、お気づきの点、ご要望などありましたら、ご自由にお書きください

- ・お子様が好きな曲だけでなく、バイオリンの独特の音色をじっくり聴く体験ができる曲があつてとても良いと思いました。もっとたくさんの方に来場してもらいたいですね。
- ・昨年は、参加者と学生さんとの間に、距離を感じましたが、今回は、スッと子どもたちの側に寄り添って、その様子をよく察知して活動されていたように思います。接し方がとても良かったと思いました。

4. その他のTinyとしての活動

(1) 長坂キャンパスの大学祭（彩音祭）でのワークショップと展示活動

11月15（土）～16日（日）にかけて実施された大学祭では、ワークショップと展示、体験コーナーを行った。

展示では、これまでのTinyの活動、音楽療法のボランティア活動や研究発表の内容を展示した。また体験コーナーとして音楽療法で使用する楽器に触れていただいたり、「Tinyあそびの集い」で行った中で好評であった遊びを再現し、自由に遊んでもらった。その他、学生がシフトを組ん

で交代で子ども達に教えながら、紙皿リースを制作したり、秋の葉っぱを色付けして壁紙に貼るコーナーも設けた。家族で会話をしながら、それぞれの個性を活かした制作物が仕上がっていた。学生たちも子どもへの説明の仕方を先輩から学んでいる様子が見受けられた。

特に夏のあそびの集いで大好評であった「水マット」は、少し冷たく感じられる秋の大学祭でも大好評で、参加者だけではなく、立ち寄った学生や教員までもが再び訪れて楽しむ姿があり、障がいや年齢を問わず、みんなが楽しめる活動を目指すTinyにとっても適した教材の発見であった。

例年行ってきた音楽療法ワークショップは、昨年度より大幅に方法を変更し15分間のドラムサークル（手作り太鼓を参加者全員に渡してファシリテーターのリードの元、即興的に演奏する）を1日4回実施するようにした。一昨年までは2日間のうち1日のみ、1時間の子ども向けワークショップを行っていたが、昨年度、この方法でドラムサークルを実施してみたところ、年齢を問わず誰もが楽しめる内容であることから大変好評で、老若男女、多くの方が出席してくださった。また短時間であるが1日4回開催されることで、展示の部屋にも連日活気が溢れていたため、今回もこの方法を継続することとなった。ただ時間の設定を10:00、11:00、13:00、14:00としたところ、特に初日の10:00に参加者が集まらなかった為、次回は昨年度の時間帯に戻し、11:00、12:00、13:00、14:00で行う予定である。当日はこのドラムサークルを始めるきっかけとなった卒業生も飛び入り参加し、Tinyを通した学びの繋がりが垣間見られた。また障がいのある妹をもつ学生が妹と共に参加し、「大学祭の中で、一番この活動を喜んでいました。」との感想をいただいた。



写真12. 展示コーナー



写真13. 体験コーナー



写真14. ドラムサークル



写真15. 葉っぱづくり

5. まとめに変えて

今年度の活動の新たな試みとしては、あそびの集いで「おやつタイム」を復活させたことである。ほんの少しの変化ではあるが、参加者が少ない時には、「おやつを渡す」、「お茶を渡す」という具体的な関わりがあることで、なかなか子ども達の間に入ることでできない学生の気持ちを後押しするきっかけになっていた。また「おやつタイム」は活動中とは違い、「食べながら」「話しながら」「休みながら」という多層的な時間であることから、ここで保護者と学生との語らいがもたらされることも多くあった。また参加人数が多い時には、ちょっと一息することで場を落ちつかせたり、他の家族との交流の時間にもなり、重要な役割を果たしていたことが伺える。些細な変化であっても、参加者や学生にとって意義深い時間になることを見出した一年であった。

このようにコロナ以降から昨年度まで、様々な変化があったことから比べると、今年は大きな変化はなく、試行錯誤してきた活動が落ちつき、学生にとっても参加者にとっても、より良い方法が安定してきた年と言える。これまで積み重ねて安定してきた内容は温存しつつ、アンケートの取り方や対象年齢の検討、参加募集の方法などの課題を整理し、障がいのある子どもたちとその家族、そして社会が求めるニーズを的確に捉えた活動ができるよう、来年度も引き続き検討を進めていきたい。

最後にTinyが変わらず大切にしてきた基本姿勢として、以下の点を確認しておきたい。

保護者アンケートでは「学生がそばにいてくれることで安心して利用できる」という意見を毎年いただいている。Tinyでは、学生、子ども、保護者（職員）がより自然に交流できるよう、「そばにいる」「見守る」といった関わりも重要な支援として位置付けている。また、日常では課題となる行動も、場の工夫によって受け止められ、共に過ごす時間が温かい雰囲気を生み出している。こうした「安心と温かさを共有する場作り」を今後も大切にしていこう。

この1年、陰日向となり活動を支えてくれた松岡先生、実習前後でも春休みでも頑張って活動に参加してくれたTiny隊の学生たち、そして活動を支えてくれた多くの関係者の皆様へ感謝申し上げます。また、今年も多く卒業生たちがTinyの活動を訪れてくれました。Tinyの絆が卒業生たちの地域にも広まり、温かな社会を育む力となっていくことを願っています。

☆T i n y の活動メンバー

宇都宮共和大学子ども生活学部

教 員 大島美知恵

松岡 展世

サークルT i n y 隊の学生たち

Ⅲ.「親子遊びの会」 ー子育てネットワークづくりプロジェクトー 実践報告

子ども生活学部 専任講師 小野 貴之
子ども生活学部 教授 杉本 太平

1. はじめに

「親子遊びの会」は、これまで地域の子育て支援を学生ボランティアが中心となって様々な行事を主催してきた。今年度は「地域で繋がる新しい出会い」を目標として、地域の子育て支援サークルとの連携を深め、人との繋がりから子育て支援のネットワーク広げていく試みを実践した。

アンケートの保護者の声からも、学生が主体的に活動を展開していることや、学生が一人ひとりの子どもに丁寧に関わる様子を評価していただいた。活動に参加した子どもの様子や保護者に向けたアンケートの結果等を踏まえて、今後も活動がさらに発展していくことができるように努めていきたい。

2. プロジェクトの目的

地域に暮らす未就学児をもつ家庭を対象として、父親を含めた親子同士、家族同士、異世代間の交流を目的とし、学生・教員ともに地域における役割について検討する。

活動に際しては、対象者が主体的に参加できることを目指し、親子で遊び、円滑な親子関係、親子同士の繋がりを促せるような援助のあり方について学生と教員ともに学ぶ。

3. 親子遊びの会2025年度の活動の計画

(1) 参加対象者

地域に在住の未就学児をもつ家庭

(2) スタッフ

教員と学生が活動内容について企画、準備を行い、当日の運営、援助等にあたる。

(3) 実施場所

本学施設 ミナテラスとちぎ

4. 実施した活動の概要

教員と学生有志ボランティアが検討した計画に沿って、各回のイベントの内容を決定し、当日までの準備を学内で行った。主には昼休みや放課後の時間を利用して、製作物の製作、司会、絵本の読み聞かせの練習を行った。当日は、親子が楽しんで安全に参加できるようにサポート役を務めた。

2025年度開催一覧

回 (通算)	開催日	活動内容	参加者 子ども	参加者 保護者	学生	教員	場所
1回 (55回)	2025年 7月13日	夏祭り	21人	15人	29人	3人	本学保育実習室、 講義室
2回 (54回)	2025年 11月29日	第1回輝け！ふたご・ みつごファミリー フェスティバルinと ちぎ	48人	44人	23人	4人	本学保育実習室、 講義室
3回 (55回)	2025年 12月14日	お正月遊び	17人	20人	6人	3人	ミナテラスとちぎ

※12月に実施した「共和大・宇短大クリスマスマーケットinシティキャンパス」に共催参加

第55回親子遊びの会

活動の概略

1. 日 時：7月13日（日）10時00分～12時00分
2. 場 所：5号館保育実習室、5号館402教室
3. 参加者：子ども21名、母11名、父4名、学生29名、教員3名 合計68名
(1歳児5名、2歳5名、3歳2名、4歳2名、5歳児4名、6歳児2名、7歳児1名)

活動の内容と進め方

1. 内 容：テーマ「夏祭り」
3つのコーナーを中心に遊ぶ（屋台製作、射的とボーリング、シャボン玉タワー）
2. プロジェクト参加教員：杉本、田所、小野
3. プロジェクト参加学生：（4年生）秋野詩織、満田萌、村上芽唯、大貫陽香
（2年生）田野實伊吹、黒尾羽衣音、岡部天音、戸辺龍、森田かすみ
（1年生）吉原梨桜、日向野結奈、山本純玲、佐藤渚、野中千寿
星陽向、本田成実、永森双葉、高橋杏菜、佐藤杏南
内山愛結、岡村柚芽、江俣桜、小暮姫依、杉山歩未
神永彩花、檜澤弥來、古内結衣、中里結芽、窪田咲葉
4. 事前準備
打ち合わせ、準備、練習のため計5回集合して進めた。
5. 当日のスケジュール

8：30～	学生集合、現地にて準備
9：45～	参加者受付・入室
10：00～10：20	ごあいさつ、コーナー紹介
10：20～11：30	3つのコーナーを中心に遊ぶ
11：30～12：00	祭りに関するペープサート (大人) 懇談、アンケート
12：00～13：00	解散・片付け、学生振り返り



6. 活動の振り返り

今年度の活動は、昨年度の同時期と比較して約2倍の子どもが参加し、会場は活気に満ちた温かな雰囲気に包まれていた。学生は主体的に運営を行い、事前準備の段階では遊びのコーナーごとに分かれ、互いに意見を伝え合いながら協力して取り組む姿が見られた。遊びのコーナーの企画においては、子どもが主体的に遊びを展開するためにはどのような環境の配慮が必要で



あるかを考慮しながら、工夫を凝らして進めることができた。当日は、子どもの気持ちや考えを尊重しながら丁寧に関わり、安全性にも十分配慮した上で活動を行っていた。

保護者の方々からは「休日に素敵な時間を提供してくださって、感謝の気持ちでいっぱいです」「学生さんや先生方が見守ってくださったので、安心して遊べました」等の感想をいただいた。

子ども、保護者、学生の関りが活発に行われており子育て支援の場作りの意義があることを感じた。

第56回親子遊びの会

(第1回輝け！ふたご・みつごファミリーフェスティバルinとちぎ)

活動の概略

1. 日 時：11月29日（土）10時～13時
2. 場 所：5-401教室、5-402教室、保育実習室
3. 参加者：24組（大人44名、子ども48名）、とちぎ多胎ネットスタッフ7名、助産師会5名
とちぎコープ5名、江崎グリコ2名 学生23名、教員4名 合計138名

活動の内容と進め方

1. 内 容：5-402教室のコーナーを中心に遊ぶ（風船カーリング、射的、ジェスチャーゲーム）
保育実習室のコーナーを中心に遊ぶ（雪だるま製作、積み木、絵本等）
2. プロジェクト参加教員：杉本、田渕、田所、小野
3. プロジェクト参加学生：（4年生）秋野詩織、満田萌、大貫陽香
（2年生）田野實伊吹、黒尾羽衣音、岡部天音、戸辺龍、森田かすみ
（1年生）神永彩花、佐藤杏南、星陽向、本田成実、永森双葉、
高橋杏菜、内山愛結、岡村柚芽、江俣桜、小暮姫依、
杉山歩未、檜澤弥來、古内結衣、中里結芽、窪田咲葉

4. 事前準備

打ち合わせ、準備、練習のため計6回集合して進めた。

5. 当日のスケジュール

- 1) 9時：スタッフ集合、受付準備・環境設定・安全確認
- 2) 9時30分～：フリーマーケット商品搬入開始



3) 10時00分～：受付開始

フリーマーケット開始 5-401教室

コーナー遊びを楽しむ 5-402教室、保育実習室

とちぎコープ試供品の配布 5-402教室前の廊下

プロのカメラマンによる家族写真撮影 5-402教室前の廊下

4) 10時15分～：「イヤイヤ期の対処法 子育ての悩みを語り合いましょう」講座

(杉本先生、田渕先生、田所先生) 保育実習室

5) 10時45分～：個別育児相談(杉本先生・助産師・栄養士) 5-401教室

6) 12時00分～：フリーマーケット終了

7) 13時00分：閉会

6. 活動の振り返り

本活動は、NPO法人とちぎ多胎ネットにとって初めての活動として、実施された。いずれのコーナーにおいても、子どもたちは夢中になって遊びに取り組み、非常に楽しそうな様子が見られ、会場全体が明るく和やかな雰囲気になっていった。学生は、それぞれの遊びのコーナーを担当し、子どもの様子をよく観察しながら声をかけたり、一緒に遊びを盛り上げたりするなど、積極的に丁寧な関わりを行っていた。また、講座では「イヤイヤ期の話を聞いて安心した」「自分だけではないと感じられた」などの声が聞かれ、保護者にとって心の支えとなる機会になったことがうかがえた。加えて、個別育児相談、フリーマーケット、試供品配布、家族写真撮影なども同時に実施し、親子が安心して過ごせる空間づくりに配慮した運営を行った。今後も地域との連携を深めながら、親子が安心して集える場づくりを継続していきたい。



第57回親子遊びの会

活動の概略

1. 日 時：12月14日（日）10時30分～11時30分

2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム

3. 内 容：テーマ「お正月遊び」

身近な素材を使って親子で楽しむ手づくりコーナー、

段ボールでできた臼と杵を使ってみんなでお餅つき、など学生が計画実践する。

4. 対象者：1歳～未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）

募集：親子10組程度

参加者募集と受付 栃木トヨタが窓口

活動の進め方とタイムスケジュール

1. 参加者：保護者20人 子ども17名 + 学生6名 + 教員3名 合計46名
2. プロジェクト参加教員：杉本、田所、小野
3. プロジェクト参加学生：（2年生）黒尾羽衣音、戸辺龍、森田かすみ
（1年生）神永彩花、佐藤杏南、永森双葉

4. 事前準備

- 第1回 11月5日（水） 昼休み 内容検討 スケジュールの確認
- 第2回 11月12日（水） 昼休み 役割分担 手作り素材準備
- 第3回 12月3日（水） 昼休み 練習
- 第4回 12月10日（水） 昼休み 最終打ち合わせ

5. 当日のスケジュール

- 9：00 現地集合
- 9：30 会場設営と準備
- 10：15 参加者受付
- 10：30 開始
- 11：30 終了 参加者見送り後、掃除・片付け
- 12：00 学生・教員解散



活動の振り返り

今回の親子遊びの会は、4年生から引き継ぎ、2年生・1年生が中心となって計画・準備・運営を行った。活動では、手遊びや絵本の読み聞かせに対して「だるまさん知ってる!」「この絵本知ってる!」など、子どもたちから自発的な声や反応が多く見られ、親しみのある題材が安心感や参加意欲につながっていたと考えられる。製作活動では、子ども自身が手作りできる内容にしたことで、完成まで意欲的に取り組む姿が見られた。保護者の方からは「簡単に作れるおもちゃ、手遊び、絵本の読み聞かせ、どれも楽しかったです」「子どもが手作り出来たので、楽しそうでした」などの感想が寄せられた。

5. 活動の振り返りと今後に向けて

本会では、これまで大学を拠点とした子育て支援活動の可能性を広げるとともに、地域の子育て支援団体・サークルと連携し、大学を地域の子育て支援団体・サークルを繋ぐ拠点として機能させていく試みを展開してきた。

2026年度は、これまでの取り組みで構築した支援モデルを基盤とし、①大学を地域の子育て世代が気軽に集い、情報や悩みを分かち合える「交流の拠点」として定着させること、②多世代・多職種が交差する「互助的コミュニティ」への拡張という二つの柱をもとに、活動をさらに展開させていきたい。単なる支援の提供に留まらず、保護者同士や地域住民が主体的に関わる仕組みを導入することで、大学が地域を繋いでいく新たな公共性の在り方を提示していきたいと考えている。

(親子遊びの会 子育てネットワークづくり事業メンバー)

代表	教 授	杉本 太平
子ども生活学部	教 授	河田 隆
	専 任 講 師	小野 貴之
子育て支援研究センター客員研究員	非常勤講師	田所 順子
子育て支援研究センター客員研究員		今村 麻子

Ⅳ. 子育て支援研究センター2025年度公開講座

1. 公開講座の概要

幼稚園教諭・保育教諭・保育士や子どもの教育・保育に関わる仕事に従事している学校教職員・行政職員・一般市民を対象に、その専門的知識や技術を研究し、あわせて大学教員と交流することを目的とする。

2. 場所

宇都宮共和大学・宇都宮短期大学 長坂キャンパス 5号館

3. 日程と講座内容

第41回 11月29日（土） 13：30～15：30	宮里先生と学ぶ子どもを主体とした保育の実践 講 師：宮里 暁美先生 話題提供者：高根沢第二幼稚園 認定こども園陽南幼稚園 大地の恵みのなーさりい
----------------------------------	---

「子どもを中心とした保育の実践」をテーマとし、お茶の水女子大学アカデミック・プロダクション講座教授の宮里暁美先生をお迎えし、地域の幼稚園・保育園・認定こども園の先生方による実践発表を通して「子どもを中心とする保育」について深く考える貴重な時間となりました。

実践発表では、保育者による計画的な環境づくりの工夫や、子ども一人ひとりの思いや発見を大切にする取組みが紹介されました。また、宮里先生からは、子どもの姿を捉えるまなざしについて、心に響くメッセージをいただきました。会場には、参加者の皆様の真剣なまなざしと、子どもたちへの温かな思いがあふれていました。

今後も地域の皆様とともに、子どもたちの育ちを支える保育を考え続けていきたいと思ひます。



V. 地域産学官連携活動報告

1. 自然遊びの会・行事实践報告 ～親子ふれあいネイチャー事業～

子ども生活学部 教授 桂木 奈巳

1 はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2014年より年に2～4回の頻度で、大学内の「子どもの森」を会場に「自然遊びの会」を実施してきた。これらの行事は、宇都宮市の「みやの環境創造提案実践事業」で提案した事業の一環として企画された年度もあり、また昨年度は「カーボンニュートラル学生地域活動支援事業」の実践の場としても活用するなど、研究・教育活動の実践の場として位置づけられてきた。さらに、学生の希望や関心を反映させながら行事内容を構成することも特徴の一つである。

本団体では、活動場所である「子どもの森」の整備を行い、その過程で得られる自然物を活用しながら活動内容を検討している。整備と行事を結びつける形で活動を進めることで、身近な自然環境を生かした体験活動を展開してきた。各回の行事では、生物多様性をテーマの一つとして取り上げ、季節に応じたプログラムを検討し、親子を対象とした実践を行っている。

2025年度は、昨年度に引き続き、NPOうつのみや環境行動フォーラム・生物多様性部会（以下、環境行動フォーラム）との連携により、「親子ふれあいネイチャー事業」として行事を合同開催した。

2 「親子ふれあいネイチャー事業8月」の実施

2-1 実施の概要

実施の概要を表1に示す。環境行動フォーラム側は集客と参加者への連絡及び当日の受付や救急関係、バーベナ側はプログラムの検討を含めた行事の実施を担当した。

表1 行事实施の概要（8月）

実施日時	2025年8月2日（土） 10：00～12：00
実施場所	宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ、図工室
学生スタッフ	4年：天谷優里、石崎莉菜、高久由伊、山本侑奈 2年：黒尾羽衣音、小埜遥香、森田かすみ 1年：潮田きら、平柳茉優
プログラムの内容	①ノーズ ②昆虫採集と観察 ③竹の水鉄砲
参加者数	参加者19名（保護者10名、子ども9名）

2-2 活動の様子

資料1に活動の様子を示す。最初に行った「ノーズ」では、林内でよく見られるセミやカブトムシを題材として実施した。続いて行った「昆虫採集」と「バッタ釣り」では、活動を行った11時頃には時間帯の影響のためか昆虫の姿が少なく、見つけることが難しい状況であった。チョウは見られたものの飛ぶ速度が速く、参加者が確認するのは難しかった。また、動かずにじっとし

ている昆虫を見つけることも容易ではなかった。参加者の中にはカブトムシを見つけないという希望を持つ子どもも多く、森に行けば必ずいて、簡単に採取できるというイメージを持っている様子もうかがえた。

その後、熱中症対策も兼ねて「竹の水鉄砲」づくりを行い、完成した水鉄砲で水遊びを楽しんだ。学生スタッフは水着を着用して水に濡れる準備をしており、自ら水を当てる的になるなどして場を盛り上げ、活動を楽しんでいる様子が見られた。竹という自然素材を用いた水鉄砲は、竹の太さに応じて綿の詰め方を調整する必要がある。この調整によって水の飛距離が変化するほか、水を吸い上げる操作にも一定の慣れが求められる。そのため、試行錯誤を促す教材となった。活動の中では、親子で工夫しながら取り組む姿が印象的であった。

資料1 活動の概要（バーベナのサイトより抜粋）

定例イベントを開催しました。今回は、NPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催です。

最初の活動は「ノーズ」。生き物の特徴をヒントに、何の動物かを当てるゲームです。この時期の主役であるカブトムシやセミを題材に、みんなで楽しく考えました。

続いて「虫探し」。暑さのせいか虫はあまり見つかりませんでしたが、「バッタ釣り」ではおなじみのショウリョウバッタに加えて、なんとカマキリまで釣れるというハプニングもありました。

その後は室内に移動して、毎年恒例の竹の水鉄砲づくり。完成した水鉄砲を持って外に出て、思いきり水遊びを楽しみました。学生スタッフも濡れることを想定して水着を着用し、準備万端です。

当日は天気にも恵まれ、暑い日ではありましたが、夏らしく爽やかな気持ちで活動することができました。



「ごあいさつ」

今回も学生さんはフルメンバーで参加です。



「ノーズ」

1年生のデビューです。4年生がフォローに入っています。初めてなのに、あまり緊張せずに頑張ってくれました。



「虫探しとバッタ釣り」

この時間帯だと虫もお休み中なのか、隠れてしまっ見つかりません。代わりにバッタに活躍してもらいました。



「つれたよ!」と見せてくれました。今回はバッタを釣ることができた子どもが多かったです。



「水鉄砲づくり」

恒例の竹の水鉄砲。既製品と異なり、作り方により「クセ」があるので、水を飛ばすことに慣れる必要があります。



水鉄砲の的になりたい学生さん。最初は躊躇する子ども、最後の方は遠慮がなくなります。

3 「親子ふれあいネイチャー事業11月」の実施

3-1 実施の概要

実施の概要を表2に示す。運営体制は8月に実施した行事と同様である。今回より参加者募集の方法をインターネットによる受付へ変更したところ、参加者数の増加が見られた。

表2 行事实施の概要（11月）

実施日時	2025年11月22日（土） 10：00～12：00
実施場所	宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ、図工室
学生スタッフ	4年：天谷優里、石崎莉菜、高久由伊、山本侑奈 2年：黒尾羽衣音、小埜遥香、森田かすみ 1年：潮田きら、平柳茉優
プログラムの内容	①箱の中身は何だろう？ ②宝探し ③木を作ろう ④森のお弁当
参加者数	参加者45名（保護者22名、子ども23名）

3-2 活動の様子

資料2に活動の様子を示す。最初に行った「箱の中身はなんだろう」は、いわゆる「中身当てゲーム」である。本活動は、卒業研究でアイヌの子どもの遊びを調べている学生が、触覚を用いて対象物を当てる遊びを参考にした「手探りあて」を行いたいと提案したことで企画された。箱の中に入れるものはマツカサやキノコなどの自然物を用い、触覚によって当てる内容に加え、嗅覚のみを使って当てる内容も取り入れ、五感を活用した導入活動とした。

続いて行った「宝さがし」（ネイチャーゲーム）では、学生が探索対象を考えカードを作成した。秋の時期であったため昆虫は少なかったものの、落ち葉や木の実などは豊富であり、参加者はさまざまな「宝」を見つけることができた。この活動を通して、自然物がどのような意味で「宝物」となるのか、またそれが誰にとっての宝物なのかを考える機会にもなったと考えられる。

その後、「木を作ろう」と「森のお弁当」の制作活動を行った。「木を作ろう」は台紙に自然物を貼り付けて自分だけの「木」を表現する活動であり、「森のお弁当」は紙製の弁当箱に自然物を詰めていくものである。いずれもシンプルな活動であるが、自然素材の多様さや色彩の豊かさを感じることができる内容となった。完成した作品はどれも個性豊かでカラフルであり、参加者

は色とりどりの秋の自然を実感することができたと考えられる。

資料2 活動の概要（バーベナのサイトより抜粋）

大学内で、定例イベントを実施しました。NPOうつのみや環境行動フォーラム様との共催でした。

最初に「箱の中身はなんだろう?」。箱の中に自然に関するものをいれ、箱の両脇から手をいれて、触感だけで中身をあてるゲームです。どんぐりや松かさ、きのこ、ヘビのおもちゃなどをいれました。

次は「宝さがし」。「とげとげ」「ぶよぶよしたもの」などがお題でした。バンダナを持って森の中を探検し、不思議なものを探してきてくれました。

後半は、秋を味わう自然物の工作を2種。「木を作ろう」では、土台の台紙に拾ってきた葉っぱや木の実をつけ、オリジナルの木をつくりました。「森のお弁当箱」は紙製の弁当箱に、これも拾ってきたものをいれてお弁当に仕立てます。ずらりと並んだ作品は個性にあふれ、色とりどりの秋になりました。

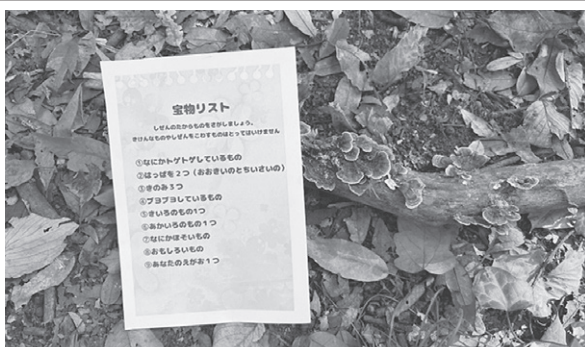


「箱の中身は何だろう?」

最初は手で触って箱の中身を当てるゲーム。こんな箱を使います。



この箱には木製の「へびのおもちゃ」。大人はすぐにわかるようでしたが、子どもは迷っていました。経験の差ですね。



「宝探し」

学生さんのオリジナルカードを使って。先日の「ブヨブヨきのこ」は今日はカラカラに！



「木を作ろう」

拾ってきたものをボンドで貼り付けます。周りを見渡すと気になる素材があります。欲しいものをすぐに取りに行けるのが屋外活動の利点です。



土台は同じですが、さまざまな表現でした。秋ならではのカラフルな色合いが素敵でした。



「森のお弁当」

「きのこごはん弁当」「のりまき」「くりごはん弁当」など、秋の味覚がたくさん。

4 おわりに

本活動では、「子どもの森」の自然環境を活かした多様な体験プログラムを実施してきた。とくに秋の制作活動では、落ち葉や木の実などの自然素材を豊富に活用することができ、参加者は自然がもつ色彩や形の多様さに触れながら作品づくりを行う様子が見られた。これらの活動が成立している背景には、日常的に行っている森の整備活動の積み重ねがあると考えられる。整備によって森の環境が維持されることで、多様な植物や自然素材を活動に取り入れることが可能となり、結果として子どもが自然の豊かさを実感できる体験へとつながっている。すなわち、環境整備そのものが自然に親しむ活動を支える基盤として機能していると考えられる。

一方、夏季に実施した昆虫採集では昆虫の姿が少なく、十分な観察ができない場面も見られた。これは活動時間帯やその日の気象条件などの影響も考えられるが、近年の夏季の高温化により、昆虫の活動量が高温時間帯に低下している可能性も否定できない。その結果、早朝や夕方など比較的気温の低い時間帯に観察されやすくなる可能性も考えられる。このような環境条件の変化は、自然体験活動の実施方法にも影響を及ぼしていると考えられる。

以上のことから、自然環境を活かした体験活動を継続的に実施していくためには、森の整備と活動内容を相互に関連づけていくことに加え、気候条件の変化にも柔軟に対応していく必要がある。具体的には、熱中症対策と昆虫観察の機会の確保の両面を考慮し、夏季行事の開催時間を早めるなど、環境条件に応じた運営方法を検討していくことが求められる。今後も継続的な観察と活動の改善を重ねながら、自然環境の豊かさを活かした体験活動のあり方を検討していく必要がある。

2. 宇都宮市環境学習センター事業の実施

子ども生活学部 教授 桂木 奈巳

1 はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2020年度より宇都宮市環境学習センターにおける自然体験行事の運営を受託している。本事業はNPO宇都宮環境行動フォーラムと協働で実施しており、市の環境課題の一つである「生物多様性」を意識した内容が求められている。

行事は毎年同一の場所で開催しているが、季節や環境の変化により毎回新たな発見が得られるため、それらを生かしたプログラムづくりを行っている。今年度は学生の希望や卒業研究の実践的な取り組みを取り入れるとともに、継続参加者にも配慮し、定番プログラムを用意しつつ同じ内容が続かないよう工夫した。なお、2025年度は7月と1月の2回、行事を実施した。

2 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター7月」の実施

2-1 実施の概要

実施の概要を表1に示す。今年度は、スタッフとして参加する学生の負担軽減の観点から、事前の現地地下見は行わなかった。しかし、これまでも複数回使用している会場であるため、特に支障は見られなかった。準備は大学内で行い、リハーサルについては当日の朝に現地で簡単に実施した。行事の周知は、環境学習センター発行の情報誌を通して行い、参加申し込みの受付は同センターが担当した。受付当日には定員を上回る申し込みがあり、本行事は例年人気の高い講座となっている。

表1 行事の概要（7月）

実施日時	2025年7月26日（土） 10：00～12：00
実施場所	環境学習センター、クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	4年：天谷優里、石崎莉菜、高久由伊、山本侑奈 2年：黒尾羽衣音、小埜遥香 1年：潮田きら、平柳茉優
プログラムの内容	①色棒さがし ②昆虫採集とバッタ釣り ③紙漉き
参加者数	参加者35名（保護者18名、子ども17名）

2-2 活動の様子

当日の活動の様子を資料1に示す。まず実施した色棒探しでは、予想通り黒い棒はほとんど見つからなかった。一方で、赤やピンク、水色など目立つ色の棒はほぼすべて見つかり、昆虫に黒や緑が多い理由を考えるうえで、参加者にとって納得しやすい結果となった。この活動は、その後に行う昆虫採集への導入としても効果的であった。

続いて行った昆虫採集では、近年出会える昆虫が減少している状況を踏まえ、昨年好評であった「バッタ釣り」を取り入れた。学生スタッフも昨年の経験から慣れており、昨年より多くのバッタを捕まえることができた。

紙漉き体験は、学生の卒業研究の実践として実施した。材料にはコウゾを用い、大学内で紙漉きに適した状態に処理したものを持ち込んだ。通常の紙漉きでは大きな枠を用いて、粘度を付けた紙料を枠全体に広げるように揺らすが、今回はハガキサイズで行ったため、ペットボトルを振るような動きで紙料が均等に広がるよう工夫した。しかし、大きな穴が空いてしまう作品も見られた。普段なかなか体験できない活動であることから、参加者は興味深そうに作業を行っていた。

資料1 行事の様子（バーベナのサイトより）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。

最初の活動は「色棒さがし」です。絵本の中でカモフラージュしている虫を探したあと、地面にばらまいた7色の棒を探しました。見つけやすい色と見つけにくい色があり、「どうして黒い虫や緑の虫が多いのかな？」と、自然界のカモフラージュについて楽しく考えることができました。

続いて行ったのは虫採りと「バッタ釣り」。昨年から取り入れている活動ですが、今年はバッタたちの反応がとても良く、釣り竿の棒に次々と乗ってくれました。毎年この時期に同じ場所で虫探しをしていますが、出会える虫の種類が少しずつ変わってきているように感じられます。

後半は室内に移動して紙漉き体験を行いました。大学の森で採取したコウゾを、紙漉き用にやわらかく煮てチリを取り除くなどの加工をして持参しました。自分で漉いた紙を使って、ランプづくりにも挑戦しました。



「色棒さがし」

かくれんぼしている虫を探します。背景の色と虫の体の色が同じだと見つけにくいです。



予想通り、黒い棒が見つかりません。黒い虫が見つかりにくい理由がわかりました。



「昆虫採集とバッタ釣り」

釣具を渡してバッタ釣りの方法を伝えます。体が小さい「オス」のバッタを狙います。



バッタがのってくれました！



「紙漉き」

「紙漉き」です。簡易版として、ペットボトルの中に紙素を入れ、シャカシャカふって、紙素をきれいに散らします。



市販の漉き枠を利用しました。しっかりと水切りをしてから乾燥。その間にランプの土台を作りました。

3 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター 1月」の実施

3-1 実施の概要

実施の概要を表2に示す。寒い中での行事であるため、前半は屋外、後半は室内で実施という構成とした。

表2 行事の概要（1月）

実施日時	2026年1月24日（土） 10：00～12：00
実施場所	環境学習センター、クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	4年：石崎莉菜、高久由伊 2年：黒尾羽衣音、小埜遥香、森田かすみ 3年：山田咲貴 1年：潮田きら、平柳茉優
プログラムの内容	①生き物文字合わせ ②動物発見ラリー ③木の実のケーキ作り ④昆虫食品の試食
参加者数	参加者29名（保護者13名、子ども16名）

3-2 活動の様子

活動の様子を資料3に示す。屋外プログラムの「生き物文字合わせ」は、体を温めることも目的として実施した。今回選んだ文字は「みのむし」である。ミノムシは近年数が減少している生き物であり、葉が少なくなる冬は見つけやすいことを伝え、今後も身近な自然に目を向けるきっかけとなるよう配慮した。

続いて実施した「動物発見ラリー」は、取り上げる生き物を変えながら毎年行っている。今年は新たに「樹液」を加えた。これは近年問題となっている「ナラ枯れ」にも関連する現象に着目したものである。昨年は確認できなかったが、今回は複数の場所で樹液の流出が見られた。行事の前にはメジロが樹液を舐めに来る様子も観察されており、身近にこのような木を見つけた際には経過を観察してほしいと伝え、日常生活の中でも自然に関心を向けてもらえるよう声かけを行った。

屋内での制作活動では、自然素材を使ったケーキづくりを行った。参加者の作品は完成度が高

く、学生が作成した見本のレベルが高かったことが、制作の質を引き上げる要因になったと考えられる。

最後に、卒業研究の一環として市販の昆虫食品の試食会を実施した。アレルギー等の注意事項を説明したうえで、自由に試食する形式としたが、予想以上に関心が高く、ほぼ全員が試食を行った。参加者はもともと自然への関心が高い人が多く、昆虫食に対する抵抗感も比較的少なかったのではないかと考えられる。本行事は全体として充実した内容となった。

資料2 活動の概要（バーベナのサイトより）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。

最初はアイスブレイクとして「生き物文字合わせ」を行いました。学生スタッフの背中に1文字ずつ貼り、参加者に見られないように逃げ回ります。参加者は学生をつかまえて背中の文字を確認し、文字を組み合わせ

て言葉を完成させます。今回の答えは「みのむし」。最近数が減ってきている生き物であることも紹介しました。

続いて行った「生き物発見ラリー」では、「ウメノキゴケ」「樹液」「冬芽」「カイガラムシ」「ジョロウグモの卵塊」などを探しながら、冬の生き物たちの過ごし方を観察しました。普段は見過ごしてしまいそうなものにも目を向け、身近な自然の面白さを感じる時間となりました。

後半は室内で、「自然物でケーキづくり」を行いました。木の実などの自然素材を使って、思い思いのケーキを作ります。事前に学生さんが作った見本は、まるでお店に並んでいる本物のケーキのような完成度。これに刺激されて、参加者の作品もどれも素敵な仕上がりになりました。

最後は「昆虫食」の試食会です。あまり人気がないかと思っていたのですが、参加者は興味津々。多くの方が楽しみながら試食していました。



「生き物文字合わせ」

学生さんの背中の文字は？みんなで追いかけて。せっかつかまえたのに「はずれ（文字がない）」だった子も！



文字をつなげると「みのむし」。ミノムシの紹介もしました。



「生き物発見ラリー」カイガラムシ

みかけは地味ですが、なかなかユニークな生態です。



「生き物発見ラリー」樹液

たくさんの樹液が出ています。来年以降のこの木の行方が気になります。



「木の実のケーキ」

オアシスに木の皮を巻いたものに、好きな材料を飾っていきます。本物のケーキみたいな仕上がりになりました。



「昆虫食品の試食」

5種の昆虫食品の試食会をしました。子どもに勧められて食べてみる保護者も！

4 おわりに

本事業では、宇都宮市環境学習センターと連携し、「生物多様性」を意識した親子向け自然体験活動を実施した。2025年度は7月と1月の2回の行事を行い、自然観察、昆虫採集、自然素材を用いた制作活動、昆虫食品の試食など、多様な体験型プログラムを通して、参加者が身近な自然に関心を向ける機会を提供した。

これらの活動は、実際に自然に触れながら学ぶ体験を重視したものであり、生き物の生態や自然環境への理解を深める契機となった。また、自然の中での発見や制作活動は、子どもの好奇心や探究心を引き出すものであり、保育の視点からも自然体験の重要性を示す活動であったといえる。

さらに、本行事は大学生にとっても環境教育や自然体験活動を実践的に学ぶ機会となり、卒業研究の内容を地域活動に生かす取り組みも行われた。今後も継続的に実施することで、地域における環境教育の充実とともに、子どもが自然と関わる体験の場としての意義が期待される。

3. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」報告

1. 「自然を感じよう～トピアリー作り」

活動の概略

1. 日 時：2025年5月18日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 参 加 者：合計26名。子12名（3歳3名、4歳1名、5歳4名、6歳4名、7歳2名）、
保護者14名 ※当日キャンセル1組
4. 担当教員：桂木、田渕
5. 参加学生：6名：子ども生活学部 4年生：天谷優里、石崎莉菜、高久由伊、山本侑奈
2年生：黒尾羽衣音、森田かすみ

活動の内容

1. 内容 テーマ「自然を感じよう～トピアリー作り」
2. 事前準備
計2回集合し、打ち合わせと事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
9：15～ 現地集合・準備
10：15～ 参加者受付・入室
10：30～11：20 制作
11：20～11：30 まとめ、アンケート、閉会
11：30～ 掃除・片づけ
4. その他
 - ・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。
 - ・学生に2,000円クオカード支給（大学より）



写真1 学生の作品



写真2 制作の様子

活動の様子

本来の「トピアリー」の歴史を簡単に紹介し、材料の説明・作り方を行い、制作を開始した。花材のワイヤーがけの方法は学生が各テーブルで手本を見せ、保護者が行うようにした。子どもは材料をじっくり選び、オアシスに花材を刺す際には真剣な表情だった。さまざまな作品ができあがった。楽しく、時間があっという間に過ぎたとの感想をいただいた。

学生の手際も連携も良く、参加者の様子を見て、作業の補助や材料コーナーでの対応を自発的に行ってくれた。



写真3 子どもの作品

以上

2. 「つくって遊ぼう～しくみを楽しむおもちゃづくり～」

活動の概略

1. 日 時：2025年9月21日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 参 加 者：計49名。子ども25名（2歳3名、3歳4名、4歳7名、5歳1名、6歳2名、7歳5名、8歳1名、9歳1名、年齢不明1名） 保護者24名
4. 担当教員：市川、星
5. 参加学生：計6名：子ども生活学部3年生（大嶋琴与、大武舞花、片見穂香、小堀志歩、庄司滯奈、永吉彩葉）

活動の内容

1. 内 容：テーマ「つくって遊ぼう～しくみを楽しむおもちゃづくり～」
紙コップ、ビニール袋、牛乳パック、輪ゴムなど生活に身近な素材や廃材を用いて、
回す、膨らませる、はじくなど動きのしくみを楽しむおもちゃをつくって遊ぶ。
2. 事前準備：計3回集合し、打ち合わせと事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
8：30～ 現地集合、環境構成、打ち合わせ
10：15～ 参加者受付、入室
10：30～11：30 ワークショップ
11：30～ アンケート、閉会、片づけ
4. その他
 - ・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。
 - ・学生に2,000円クオカード支給（大学より）

活動の様子

ハロウィンをテーマに、「おばけ」をイメージした4種類の手作りおもちゃを提案した。子どもたちは保護者やボランティア学生とともに身近な素材を用いて、自分でつくること、しくみの面白さ、自分でつくったおもちゃで遊ぶ楽しさを味わった。

保護者アンケートからは、「（参加児が2歳～7歳の3人きょうだいだが）それぞれの子どもが楽しめる内容でよかった」、「学生が協力的で楽しく参加できた」などのお言葉をいただいた。

学生アンケートからは、「教材準備をしたことで同じおもちゃでも素材の違いによって経験する内容が違ってくるのが分かった」、「事前準備の大切さを実感した」、「子どもへの伝え方、説明の仕方や、援助のタイミングを考えることが出来、今後の実習に活かせる学びを得ることができた」などの感想が寄せられた。



写真1
おばけの顔をイメージして



写真2 自分でつくる

参加する子どもの年齢が2歳から9歳と幅広かったが、それぞれの子どもが興味・関心を沸かせ、自分なりに教材と関わり、しぐみの面白さや楽しさを見出していた。また、提案した教材を介して初めて出会った子ども同士が遊びでつながる姿も見られ、子どもや保護者同士の交流の場ともなった。



写真3 一緒にねらいを定めて

3. 「親子リトミック」

1. はじめに

リトミックは日本においては幼児教育、療育、地域の子育て支援事業等の中に広まりつつあり、また「習い事」としても楽器を習う前の音感教育として普及してきている。この親子リトミックの活動は企業の地域コミュニティ施設と連携し、以下の3点の目的をもって行っている。①子どもだけではなく親も共に楽しめる場を提供する。②地域の親子同士の交流、学生たちとの交流を推進する。③学生が親子の関わりを通して、保育者としての視点を学ぶ場となる。

これまで2歳～5歳の子ども達を対象に年3回のペースで2年間、そして一昨年からは年2回のペースで行ってきた。そして、今年度は初の試みとして、1回目は2～5歳の幼児、2回目は生後半年から1歳の歩行開始前の乳児に分けて行った。

この1年の活動について報告する。

2. 活動概要

(1) 日時

①2025年7月13日(日)

②2026年2月15日(日)

10:30～11:15 リトミックワークショップ

11:15～11:30 学生による絵本の読み聞かせ等

(2) 会場：ミナテラスとちぎ

(宇都宮市インターパーク6-2-1)

セミナールーム

(3) 対象者：①2歳～未就学児をもつ家族(父親・母親・子ども)

親子合わせて20名程度

②生後半年から1歳(歩行開始前)の子どもをもつ家族

親子15組程度

参加人数 7月13日(子18名、保護者21名)

2月15日(子11名、保護者19名)

(4) 参加募集と受付：栃木トヨタが窓口

(5) 参加学生：子ども生活学部1年生2名、2年生2名、4年生4名の学生が参加した。

(6) 参加教員：大島、杉本、石本

3. 活動の内容

(1) 各回のテーマ

7月13日「いろんな音と動きで遊ぼうリトミック」

2月15日「親子でふれあい、ほんわかリトミック！」

(2) 事前準備

毎回4～5回の打合せと練習を行った

第1回：企画・担当決定

第2回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習

第3回：教材製作

第4回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習

第5回：最終打ち合わせ

(3) 当日のスケジュール

9:00 現地集合

9:30 会場の設営と準備

10:15 参加者受付

10:30 ワークショップ開始

11:15 学生による絵本の読み聞かせ等

＊7月は保護者資料「リトミック教育が育むもの」配付

11:30 終了、参加者は解散。掃除・片づけ

12:00 学生・教員解散

4. 活動の様子

各回共に季節の風物詩を題材とし、視覚教材を入れたパネルシアターや身体活動、楽器活動を行った。これまで2歳～5歳の未就学児を対象としていたが、乳児のご兄弟が参加することも多く、年齢枠がはっきりしない状態で行われていた。そこで今年度からは、小さな乳児のお子様を対象としたリトミックを2回目に実施し、子ども達の発達状況に合わせたプログラムを提供できるようにした。これまで通りご兄弟での参加も可としたが、内容は各回の対象年齢に準ずるという理解をお願いした。

①7月13日

圧縮袋に入れた水の音や感触を楽しむ遊びや、凹凸のある紙を利用したギロ（表面の波状の凸凹部分をこすって鳴らす楽器）の作成、生活用品での合奏、風船の音や動きを楽しむ活動など盛りだくさんの内容となった。子ども達は、ボランティア学生たちの動きを頼りにそれぞれの表現を楽しんでいた。

保護者アンケート：水遊びと風船の活動が大好評だった。なかなか家庭ではできない、学生の協力があってこそダイナミックな遊びに「最高の笑顔になっていました」、「さまざまな感触を楽しむことができて、子どもも喜んでいました」などのお言葉を頂いた。

学生アンケート：子どもの様子をみながら、予定とは違う関わりをするなど実践的なことが学べたとの意見があった。



②2月15日

音楽に合わせて抱っこで揺れる遊びやタッピングなどの触れ合い遊び、楽器や素材を用いた活動など、親子で楽しめる多彩な体験を提供した。学生たちは教材準備において、乳児の発達段階に適した素材選び、大きさ、動かし方などを検討し、当日も臨機応変に親子に対応していた。

また父親の参加が非常に多く、開始前は遠巻きに見ていた父親も、活動が始まると率先して子どもと共に参加していた姿が印象的であった。

保護者アンケート：「日曜日の開催だったので、父親も一緒に楽しく参加できたことが良かった」という声が多数寄せられた。プログラムの内容では、手芸わたと排水溝ネットで作成した“雪玉”を使った遊び、楽器を用いた活動、さらには他の家族と交流する活動が好評であった。また年齢に分けた開催方法が良かったとの意見もあった。

学生アンケート：実習では得がたい保護者との対話や関わりを経験できたことが、貴重な学びになったとの意見が多かった。また、子どもを中心に、ご夫婦で協力しながら参加している姿を見て、子育ての楽しさを感じたという声もあった。



5. まとめ

今年度は初めての試みとして乳児と幼児に分けて開催したが、年齢によって分けることで、参加者も、学生たちも、講師も、それぞれにメリットがあったと感じられた。参加者から直々に参加しやすくて良かったという言葉があったのは安心である。学生達も発達段階に応じた音楽活動の違いを学ぶことができ、2回目では実習ではなかなか体験できない父親のかかわりについても学ぶことができたのは貴重な機会であったと思われる。できれば来年度もこの方法で継続したいと考えている。

来年度に向けた課題としては、コロナ以降自粛傾向にある「息」を使った遊び、「吹く楽器」などを状況をみながら取り入れていきたい。昨年もこの課題をあげていたが、やはり今年度もインフルエンザの流行等があり、実践には至らなかった。

長らく続いたマスク生活の子ども達への影響が、昨今、問題視されることが多くなってきている。生活と共にある豊かな、楽しい音楽遊びの中で、改善の糸口となるような活動を検討していきたい。

4. 「忍者になって修行でござる！」～親子で楽しむ運動遊び～

活動の概略

1. 日 時：11月23日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 参 加 者：子13名（1歳1名、2歳2名、3歳4名、4歳2名、5歳3名、6歳1名）
保護者13名
4. 担当教員：月橋、霜触
5. 参加学生：5名（子3年：秋山愛唯、片野光彩、柴田歩実、鈴木愛実、山内玲羽）
合計33名

活動の内容

1. 内 容：テーマ「忍者になって修行でござる！」～親子で楽しむ運動遊び～と題して、主に新聞紙を用いた運動遊びを楽しんだ。
2. 事前準備
計4回集合し、打ち合わせと事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
9：00～ 現地集合・準備
10：15～ 参加者受付・入室
10：30～11：30 ワークショップ
11：30～ アンケート、閉会・片づけ
4. その他
 - ・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。
 - ・学生に2,000円クオカード支給（大学より）



写真1 伝授する「術」の紹介



写真2 巻物プレゼント



写真3 みんなで「にんっ！」

活動の様子

まず、子どもたちとともに忍者に関するアイスブレイク・リズム運動遊びを行った。

メインの活動では、「親子で行う運動遊び」をテーマに忍者の術に見立てた運動遊びを計6つ行った。各親子は、一つひとつの術を味わいながら何度も挑戦しており、積極的に取り組む様子が見てとれた。

今回は、プレゼントとして、まず受付を済ませた参加者に忍者のはちまきを渡し、子どもたちはそれをつけて、忍者の気分になり取り組んでもらった。すべての術を終え、最後に修了の巻物を渡し、とても喜んでいる子どもたちの笑顔とともにワークショップが終了した。

事後の保護者アンケートでは、「忍者になりきって楽しみながら新聞遊びができ、とても楽しかったです」との感想をいただいた。

今回参加した子ども生活学部は、3年生ということで、これまでの保育の学びを活かして取り組むことができた。

Ⅵ. 宇都宮共和大学子ども生活学部卒業研究

1. 2025年度卒業研究題目一覧

相澤 柚花	大学生の書道に対する印象についての考察
秋野 詩織	香りと身だしなみがもたらす対人関係について
天谷 優里	草木染が子どもに及ぼす影響 ―重ね染の効果の検討―
荒牧 志帆	子育てにかかる費用
石崎 莉菜	自然の中で自由に遊ぶ ―冒険遊び場プレーパークの取り組み―
石田 萌笑	きょうだいの有無によるスポーツ開始の動機づけ
岩本寧々花	兄弟がいる子どもと一人っ子のスポーツを始めるきっかけの違い
宇加地菜々美	障害があってもなくても楽しめる布絵本 ―インクルーシブな遊び体験につながる布絵本づくりを目指して―
大貫 陽香	ダンスから育まれる能力と指導方法
大森 李奈	在日フィリピン人女性の語りにみる3つの壁とその変容
岡部 姫奈	絵本に描かれた多様な家族
小野口亜紀菜	ディズニーのプリンセス映画にみるプリンセスの自立
恩田穂乃花	大学生のひとり時間と恋愛依存の関連について ―能動的一人・受動的一人から―
神田 愛実	子ども食堂における親子支援
菊池 真奈	出生順位が社会に与える影響
木村 叶	『それいけ！アンパンマン』が幼児教育に与える影響
小出 柚奈	音楽聴取とメンタルケア ―音楽の演奏形態による検証―
小林 歩未	女ごころ ―自己肯定感を高めるために―
今野 恵利	複言語環境の子どもの言葉の育ちと保育者の対応 ―A幼保連携型認定こども園におけるインタビューを通して―
柴田 真月	泥団子作りにおける子どもの発達への影響
菅野 風歌	音楽の印象を決める要素について
関 愛花	TikTokのダイエットトレンドが大学生のボディイメージに与える影響
五月女愛海	映像と音楽の相互作用 ―それぞれの印象に着目して―
高久 由伊	アイヌ文化から学ぶ遊びと子どもの育ち
高橋杏花里	アイドルにハマるきっかけと魅力
高村 勇吹	過去のスポーツ経験の有無とレジリエンスとの関連 ―集団種目と個人種目の比較―
立石 紗良	サンリオキャラクター「ハローキティ」の魅力 ―社会的変遷や価値観に着目して―
丹野 真瞳	大学生の食品添加物に対する意識調査とパンフレットによる意識向上効果の検討
寺門 沙藍	夢と感情のつながり

野澤羽音美	「保育・教育実習におけるネガティブ体験とその語りによる心情の変化」 —アンケート調査とインタビュー調査による分析—
服部 陽優	自然と共に生きる“人間”の四季感覚と色への感じ方
福田 姫和	子どものやる気ジレンマに関する研究 —「嫌だけどやる」要因の検討—
細川 航輝	手づくり楽器の教育的価値について
本莊 美雨	スポーツにおける複数指導者が存在することのメリット・デメリット —被指導経験の再解釈過程を通して—
松本 夢叶	ディズニー音楽とその言葉の意味 —レット・イット・ゴーを中心に—
三田 果凜	睡眠時間の非抑制は疲労感を軽減し得るか？ —疲労感VASからみた検討—
満田 萌	子どもへの“いのち”の伝え方に関する考察
村上 芽唯	子どもの遊び場面における物的環境についての検討 —アフォーダンスの視点から—
築島 悠莉	若者言葉の変遷に関する考察
山本 侑奈	自然素材を使った紙漉き

2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第39回学生研究発表報告

主催：全国保育士養成協議会関東ブロック協議会

日程：2026年2月27日（金）

会場：聖徳大学

複言語環境で生活する子どもの言葉の育ちと保育者の対応
～A幼保連携型認定こども園におけるインタビューを通して～
宇都宮共和大学 子ども生活学部4年 今野 恵利
指導教員：星 順子

子どもへの“いのち”の伝え方に関する考察
宇都宮共和大学 子ども生活学部4年 満田 萌
指導教員：小野 貴之

複言語環境で生活する子どもの言葉の育ちと保育者の対応

～A 幼保連携型認定こども園におけるインタビューを通して～

今野 恵利

(宇都宮共和大学 子ども生活学部 子ども生活学科 4年)

1. 研究の背景と目的

保育実習や教育実習の際に、複言語環境で生活する子どもに出会う機会があった。その中には、日本語を十分に話すことが難しかったり、集団行動に参加しにくかったりする子どもの姿が見られた。保育者や友達の「言葉」をどの程度理解しているのか判断が難しく、関わり方に迷う場面もあった。このような経験から、複言語環境で生活する子どもの言葉の育ちと、保育者の関わり方に関心を抱くようになった。

欧州では、言語の学びや指導、評価に関する共通の基準として、欧州言語共通参照枠 (CEFR) が示されている。ここでは「複言語・複文化能力」という考え方のもと、一人ひとりが経験してきた言葉や文化を大切にする視点が重視されている。これは、「わたし語・わたし文化」に目を向け、個人がもつ言葉と文化の力を捉える考え方である。奥村 (2019) は、この言語教育の特徴として、学習者の「できること」に注目し、言語レベルを肯定的に捉える視点が示されていることを紹介している¹⁾。

本研究では、こうした背景を踏まえ、複言語環境で生活する子どもに対して、保育者がどのように対応しているのか、そのプロセスや具体的な方法を明らかにすることを目的とする。

2. 複言語環境で生活する子どもの「言葉」の育ち

言語学の先行研究では、母語の維持や発達が第二言語習得に不可欠であることが繰り返して述べられている。中島 (1998) は、親子関係の形成、文化の継承、アイデンティティの確立にも関わること²⁾、松井

(2025) は、子どもの感情理解や情緒の発達にも重要な役割を果たしていることを強調している。また、就学前教育が始まると第二言語と接する頻度が増え、第一言語の力が低下、喪失することがあることを示して

ている³⁾。これらの研究からは、日本語だけではなく家庭の言語 (母語) の維持や発達を大切にしながら関わっていく必要があることがわかる。

3. 調査方法

栃木県のA 幼保連携型認定こども園に勤務し、複言語環境で育つ子どもの担任経験がある保育教諭2名に、対面形式の半構造化インタビューを行った。インタビューは2025年8月に行い、1回あたりの時間はおおむね30分であった。

4. 研究方法

インタビューの内容は、逐語録としてまとめ、文章を繰り返し読みながら、「子どもの姿」と「保育者の対応」の2つのグループに分類し、入園から卒園までの流れに沿って整理した。その上で、子ども理解や保育者の意図を捉える上で重要と判断される記述を抽出した。抽出した内容は、共通点や類似点ごとにまとめカテゴリー化して考察を行った。

5. 倫理的配慮

研究倫理遵守に関する契約書および研究協力依頼書を作成し、インタビュー開始前にデータの取扱いや匿名性の確保等について口頭で説明し、研究参加への同意を得た。

6. 結果と考察

(1) 子どもの姿

①入園から半年頃まで

保育者の語りから、共通して見られた点は2つあった。第一に、対象となった子どもは入園後しばらくの間、園生活の流れや状況を理解することが難しく、自己を十分に発揮できない姿が見られたことである。第

二に、園生活の中で言葉を用いて、自分らしさを示すようになるまでには、おおよそ半年ほどの時間を要したことである。

この時期に見られた具体的な姿としては、①保育活動への不参加、②状況理解の難しさ、③戸惑いや気持ちの揺れ、④友達との関わりの難しさ、⑤コミュニケーションの難しさ、⑥母語を聞かれる恥ずかしさの6点が挙げられた。入園当初は、言葉で状況を理解することが難しく、なかなか自己を発揮できない不安定な姿が見られた。これは、言葉の育ちの基盤となる安心できる環境の重要性を示していると考えられる。

②入園後、おおよそ半年以降

半年以降の子どもの姿としては、①気になる行動の減少、②日本語の面白さを感じて使おうとする姿、③友達との関わりの増加、④日本語が伝わる喜び、の4点が挙げられた。これらの姿からは、子どもが園生活の状況の理解ができるようになり、行動が安定し、友達との関わりが広がっていることがわかる。半年以降に見られた子どもの姿には、保育者や友達との関わりのなかで、言葉が育っていく過程がうかがえた。

(2) 保育者の対応

①入園から半年頃まで

保育者の語りで共通していた点は、複言語環境で育つ子どもが安心して園生活に適応できるように、多面的な支援を行っていたことである。具体的には、①子どもの言葉を丁寧に受け止める、②生活の流れや活動内容を保育者が一緒に示す、③非言語コミュニケーションの活用、④子どもに合わせた個別的なサポート、⑤視覚的にわかりやすくする工夫、の5点が挙げられた。保育者は子どもが言葉だけに頼らずに園生活に参加できるよう、言語環境を工夫していた。視覚的な支援や非言語の関わりは、子どもが活動内容や状況を把握する助けとなり、安心して過ごすための役割を果たしていたと考えられる。

②入園後、おおよそ半年以降

半年以降の保育者の対応としては、①言葉を使う経験の機会づくり、②遊びを通した友達との関係づくり、

③日本語特有の難しさへの配慮、④擬音語や感情表現は非言語で補足する工夫、の4点が挙げられた。

保育者は、子どもが「できていること」や「やろうとしている姿」に着目し、その変化を丁寧に捉えながら、子どもの姿に合わせて関わり方を変化させていた。

このような、肯定的なまなざしや柔軟な関わり方は、子どもの言葉の育ちに大きな影響を与えていたと考えられる。

7. 総合考察

入園当初の子どもは、状況理解が難しく戸惑う姿が見られたが、保育者は視覚的支援や非言語的な方法を用いて安心して過ごせる環境を整えていた。半年以降は、日本語を使おうとする姿や友達とのやり取りが増え、保育者もその変化に合わせて、言葉の経験や他者との関わりが広がるように関わり方を調整していた。

複言語環境で生活する子どもは、日本語と家庭の言語を行き来しながら過ごしている。保育者は、日本語の習得だけに目を向けるのではなく、子どもの姿をありのままに受け止め、その姿に合わせて関わり方を柔軟に調整しながら対応していた。このような対応は、子どもが自分の言葉で表現しようとする姿を支える役割を果たしていたと考える。言語や文化の違いを「課題」として捉えるのではなく、子ども一人ひとりの背景や複言語・複文化能力を尊重し、その多様性を大切にしながらそれぞれに応じた柔軟な対応の重要性が示唆された。

8. 本研究の限界と課題

本研究の限界と課題として対象者が限られていたこと、卒園期の状況について十分に聞き取りができなかった点が挙げられる。今後は、さらに対象者や分析の視点を広げ、検討を深めていく必要がある。

9. 引用・参考文献

1. 近藤・坂本・西川編、奥村 (2019) 『親と子をつなぐ 継承語教育 日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版
2. 中島和子 (1998) 『言葉と教育』海外子女教育振興財団
3. 松井智子 (2025) 『バイリンガルの壁—子どものことばの発達をどう支えるか』岩波新書

子どもへの“いのち”の伝え方に関する考察

満田 萌

(宇都宮共和大学 子ども生活学部 子ども生活学科 4年)

1. 研究の目的と背景

現代社会では、身近な自然や生き物と直接関わる機会が減少しており、子どもが「生と死」を実体験として感じる場面が少なくなっている。一方でいのちに対する想像力の育ちが、他者への思いやりや倫理観を考えていく上で重要であることが考えられる。そのため、保育現場において子どもが生き物と関わり、生命を実感する機会を確保することは重要である。また、生き物の死をどのように受け止め、どのように言葉かけをしていくかという点については保育者の価値観や援助のあり方に深く関わる課題である。

本研究では、子どもに“いのち”について伝える場面における適切な支援の在り方を検討する。子どもの発達に応じた援助を行う上で、“いのち”について伝える場面に焦点を当てて、援助のあり方について明らかにする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

保育者1名(保育歴21年)にインタビュー調査を行った。調査対象の保育者はこれまで保育現場で担任経験を有している。子どもが生き物と関わる場面の保育の実践経験が豊富であることから、本研究の目的に沿って幅広い話が得られると判断し、対象者として選定した。なお、インタビューは倫理的配慮のもと、研究の目的と方法について事前に説明し、同意を得た上で実施した。

(2) インタビュー調査の時期

令和7年7月19日に行った。

(3) インタビュー内容

①園で子どもが生き物と関わる場面にはこういったものがあるか、②子どもが様々な生き物と関わるなか、

生き物の“死”と出会う経験はあるか、③子どもの反応を見てアプローチや支援を変えることはあるのか、④先行研究を調べる中で、現実的説明と非現実的説明に分類されることがわかったが、実際にどちらのほうが使われているか、⑤保育者が子どもに生き物の死を伝える方法についての講座や研修は行われているのか、⑥保育者が子どもに生き物のいのちを伝えるうえで大切にしていることはなにか、などについて尋ねた。

3. 結果

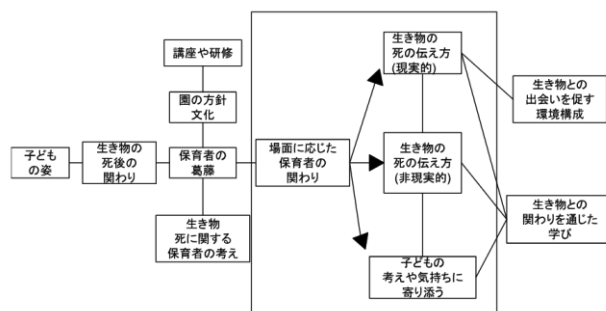


図1 図解による構造化

本研究では、インタビューで得られた逐語録を用いて分析を行った。その結果、子どもと保育者が生き物の“いのち”と向き合う際の関わりが明らかになった。図1は、分析によって抽出された各グループを配置し、それらの関連性を図解として示したものである。

研究を進めていくなかで明らかになったことは三つある。一つ目は、子どもが生き物に対して強く関わる場面において、保育者は様々なことを葛藤しているという点である。子どもの生き物に対する強い関わり方として、手の中にいる蟻をぎゅっと握りつぶす、ダンゴムシの皮を引きはがす、捕まえたガガンボの羽を抜くといった姿がある。こういった子どもの姿は、自分の動作による変化を何回も確かめたり、こうしたらどうなるのだろうという好奇心や探求心からこのような

行動が起きると思われる。

しかし、こういった子どもの姿に対して保育者は、様々な要素が含まれている葛藤を抱えていることが分かった。それは、教育的な視点と保育者自身の生き物や死後に関する価値観と園の方針・文化の相違が見られる可能性があるということである。教育的な視点としては、子どもの生き物に対する関わりを保育者が止めてしまうと、子どもの生き物への興味や探求心を妨げてしまうのではないかという点である。子どもの行動を止めるべきか、子どもを尊重し見守るほうがよいのか線引きが難しいことがわかった。また、子どもと生き物が関わる場面において、必ずしも保育者が園と価値観が合っているとは言いきれないため、園の方針や文化と保育者自身の価値観が違ふとそこで葛藤が生まれると言えることがわかった。他にも生き物の生と死の倫理的な部分と、保育的な意義のバランスに保育者自身の価値観のゆらぎがあり、保育者は常に葛藤しながら関わっていることがわかった。

二つ目は、保育者の援助は三つに分類されることである。保育者は、上記の葛藤を抱えながらも、場面に応じて子どもと関わっていることがわかった。この関わりは三つに分類され、一つ目は「生き物の死の伝え方(現実的)」二つ目は「生き物の死の伝え方(非現実的)」三つ目は「子どもの考えや気持ちに寄り添う」である。現実的な伝え方とは、死んだ生き物に対して「もう動くことはない」、「命が終わりこれからずっと起きることはない」などと伝えることである。また、死んだガガンボを白い紙の上にのせて羽を抜いたり、お腹の中を見たりと実験的な要素をふくめて生き物を観察することも現実的な説明といえる。非現実的な伝え方とは、「神様のところへ行ったんだよ」などと伝えることである。子どもの「天国に行ったのかな？」という言葉は、その子どもにとっての事実であり、疑いのような事実として語られている。その子どもが言っていることに応え、子どもが言っていることを先延ばしせず、に今のその子どもの気持ちを大切にすることが重要である。三つ目の「子どもの考えや気持ちに寄り添う」は、子どもの気持ちや考えに共感し、寄り添って声をかけるといった受容的な関わりである。子どもの姿を見守りながら子どもの反応を受け止めたり、子どもが

発する言葉に対して受容・共感する関わりである。どの援助にも正解・不正解はなく、共通していえることは子どもを尊重し子どもの反応に合わせて保育者も応答していくことである。保育者からすぐ子どもに関わりに行くのではなく、子どもの反応を待ってからどう関わるのかを瞬時に考え応答していくことが大切である。

三つ目は、このような保育者の応答的な関わりのもと、子どもは生き物との関わりを通して様々な学びを得ていくことである。子どもは、五感を通して世界を理解していく。触る、観察する、音を聞くなどといった直接的な体験が、「なんで動くのか」「どこに行くのか」といった疑問につながり好奇心や探求心が培われていくと考えられる。

4. 考察

幼児期は命や死という概念を論理的に理解することは難しいが、生き物の成長や動きを体感的に感じる経験は、心の土台を形成する重要な契機となる。本研究の結果から、保育者は子どもの生き物への強い関わりに対して葛藤を抱きながらも、子どもの姿や反応に応じて関わりを調整していることが明らかになった。この葛藤は、子どもの生き物への探求心と生命への配慮の両立を模索する過程で生じるものであり、いのちに向き合う保育実践の困難さと重要性を示唆している。

また、現実的説明、非現実的説明、子どもの考えや気持ちに寄り添うといった関わりは子どもの理解や感情に応じて使い分けられていた。こうした応答的な関わりのもとで、子どもは生き物との出会いを通して好奇心や探求心を深め、次の生き物との関わりへとつなげていく可能性が示唆された。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, pp. 193-210
- 2) 坂田和子・牧正興 (2005) 「Death Education Program の導入時期に関する検討」 『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』, pp. 23-27
- 3) 中坪史典 (2012) 『子ども理解のメソッドロジー』ナカニシヤ出版, pp. 19-34

資料

I. 2025（令和7）年度子育て支援研究センター事業報告

1. 主催事業

（1）子育て支援研究センター公開講座

第41回 11月29日（土）

「宮里先生と学ぶ子どもを中心とした保育の実践」

講師 宮里暁美先生

実践報告 高根沢第二幼稚園、大地の恵みのなーさりい、認定こども園陽南幼稚園

参加者 一般参加者38名 学生40名

（2）地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成事業

1）訪問型交流保育

（1）連携園 認定みどりこども園

（2）日 程 第1回 5月1日（木） 年長児47名、年中児47名

第2回 5月7日（水） 年長児47名、年中児47名

（3）対 象 学生 4年生40名

2）訪問型交流保育

（1）連携園 風と緑の認定こども園

（2）日 程 第1回 5月1日（木） 年長児82名、年中児60名

第2回 5月7日（水） 年長児82名、年中児60名

（3）対 象 学生 4年生40名

3）来校型交流保育

（1）連携園 しらゆりこども園

（2）日 程 第1回 6月11日（水） 年中児81名

第2回 11月12日（水） 年中児81名

第3回 1月28日（水） 年中児81名

（3）対 象 1年生38名

4）来校型交流保育

（1）連携園 認定みどりこども園

（2）日 程 第1回 5月28日（水） 年少児45名

第2回 6月4日（水） 年中児36名

第3回 6月18日（水） 年長児43名

（3）対 象 1年生38名

5）来校型交流保育

（1）連携園 つるた保育園

- (2) 日 程 第1回 1/15 (木) 3歳児36名
 第2回 1/16 (金) 4歳児36名
 第3回 1/26 (月) 5歳児36名

(3) 対 象 1年生38名

6) 訪問型交流保育

- (1) 連携園 認定こども園釜井台幼稚園 0歳児～5歳児クラス 325名
 つながるほいくえん釜井台 0歳児～5歳児クラス 92名
 つながるほいくえん御幸ヶ原 0歳児～5歳児クラス 101名
 認定こども園氏家幼稚園 3歳児～5歳児クラス 302名

- (2) 日 程 第1回 1月14日 (水)
 第2回 1月21日 (水)

(3) 対 象 学生 3年生48名

(3) Tiny (障がいのある子どもと家族の支援)

1) あそびの集い (障がいのある子どもたちとのふれあい遊び)

① 7月20日 (日) : 地域の障がいのある乳幼児・児童とそのご家族

子ども7名 保護者8名

② 2月7日 (土) : 地域の障害のある乳幼児・児童とそのご家族

および地域の児童発達支援・放課後等デイサービスの利用者と職員

子ども21名 保護者・職員7名

2) 第13回Tinyファミリーコンサート

～障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い～

日時 : 11月24日 (月・祝) 13:30～15:00

場所 : 宇都宮市サンアビリティーズ

内容 : Ciel 参加者 : 85名 (一般65名 学生18名 教員2名)

3) 彩音祭でのワークショップと展示活動

(4) 親子遊びの会 ―子育てネットワークづくり―

第1回 (第55回) 7月13日 (日) 本学保育実習室、402教室

「夏祭り」 参加者 子ども21名 保護者15名

第2回 (第56回) 11月29日 (土) 5-401教室、5-402教室、保育実習室

「第1回輝け!ふたご・みつごファミリーフェスティバルinとちぎ」

参加者 子ども48名 保護者44名

第3回（第57回） 12月14日（日） ミナテラスとちぎ
「お正月遊び」 参加者 子ども17名 保護者20名

（5）ミナテラスとちぎ×大学連携親子ワークショップ

1）子ども生活学部

第1回	桂木	5月18日	参加者	子ども12名	保護者14名
第3回	大島	7月13日	参加者	子ども18名	保護者21名
第5回	市川 星	9月21日	参加者	子ども25名	保護者24名
第7回	月橋 霜触	11月23日	参加者	子ども13名	保護者13名
第8回	小野 杉本	12月14日	参加者	子ども17名	保護者20名
第9回	大島	2月15日	参加者	子ども13名	保護者16名

（6）保育者のためのリカレント教育

なし

2. 地域貢献事業

（1）那須塩原市民大学

前期2講座（シティライフ学部1・子ども生活学部1）

8月2日（土） 大島先生「リトミックを通して育む親子のコミュニケーション」

参加者：親子8組

内訳：子ども10名 保護者8名

参加学生：学生3名

（2）とちぎ子どもの未来創造大学

7月19日（土） 桂木先生「アイ（藍）でマイ箸袋を染めよう！」

参加者：14名 見学者12名

（3）大学地域連携活動支援事業

なし

（4）令和7年度大学コンソーシアムとちぎ

1）とちぎ学生アイデアピッチバトル

（5）宇都宮市環境学習センター事業

「親子で楽しく自然体験in環境学習センター7月」

7月26日（土） クリーンパーク茂原東側林地

参加者35名（保護者18名、子ども17名）学生9名

「親子で楽しく自然体験in環境学習センター 1 月」

1 月 24 日（土） クリーンパーク茂原東側林地、環境学習センター 4 階
参加者 29 名（保護者 13 名、子ども 16 名） 学生 9 名

（6）親子ふれあいネイチャー事業 NPO うつのみや環境行動フォーラム

8 月 2 日（土） 宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ
参加者 19 名（保護者 10 名、子ども 9 名） 学生 9 名

11 月 22 日（土） 宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ
参加者 45 名（保護者 22 名、子ども 23 名） 学生 8 名

Ⅱ．2025(令和7)年度子ども生活学部専任教員の社会貢献活動

職 位	教員氏名	委嘱の内容		
		名称	職位	設置者
学長	須賀 英之	[各種審議会・委員会委員等]		
		栃木県私立学校審議会	会長	栃木県
		栃木県文化振興審議会	会長	栃木県
		栃木県公立高等学校協議会	委員	栃木県
		栃木県文化功労者選考委員会	委員長	栃木県
		とちぎの元気な森づくり県民会議	会長	栃木県
		栃木県信用保証協会外部評価委員会	委員長	栃木信用保証協会
		うつのみや産業振興協議会	会長	宇都宮市
		那須塩原市社会教育委員	委員	那須塩原市教育委員会
		栃木県私立中学高等学校連合会	副会長	
		[団体兼職]		
		大学コンソーシアムとちぎ	副理事長	
		栃木県交響楽団	会長	
		栃木県楽友協会	会長	
		栃木県オペラ協会	理事	
		栃木県文化協会	常任理事	
		うつのみや文化創造財団	理事	
		宇都宮まちづくり推進機構	理事長	
		「よみがえれ！宇都宮城」市民の会	会長	
		宇都宮MICEネットワーク	会長	宇都宮市
		宇都宮市創造都市研究センター	センター長	
		全国音楽療法士養成協議会	理事	
		栃木銀行	社外監査役	栃木銀行
		あしぎん国際交流財団	理事	足利銀行
		あしぎん奨学基金委員		
		宇都宮みずほ研修会	会長	みずほ銀行

学科	職 位	教員氏名	委嘱の内容		
			名称	職位	設置者
子ども生活学科	教授	河田 隆	栃木県子どもの体力向上推進検討委員会	副委員長	栃木県教育委員会
			栃木県幼児期からの運動遊び普及検討委員会	委員長	栃木県教育委員会
			栃木県レクリエーション協会	副会長	栃木県レクリエーション協会
			全国健康保険協会栃木主支部健康づくり推進協議会	副議長	全国健康保険協会栃木支部
			公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団	評議員 (議長)	公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団
			宇都宮市社会教育委員会	委員長	宇都宮市
			宇都宮市子ども子育て会議	委員長	宇都宮市
			栃木県社会教育委員協議会	理事・ 評議員	栃木県教育委員会
			公益財団法人栃木県民公園福祉協会	評議員	公益財団法人栃木県民公園福祉協会
			那須塩原市市民大学運営委員会	委員長	那須塩原市
			那須町小中学校部活動地域移行検討協議会	委員長	那須町教育委員会
			幼少期の運動遊び指導者指導者研修会	講師	栃木県教育委員会
			家庭生活支援員養成研修会	講師	栃木県ひとり親家庭福祉連 合会
			那須町保育士研修会（2保育園）	講師	那須町こども未来課
			栃木県西部地区保育研修会	講師	栃木県西部地区保育研究会
			自治労土地現本部健康福祉評議会学習会	講師	自治労栃木県本部
子ども生活学科	教授	杉本 太平	那須塩原市市民大学講座	講師	那須塩原市教育委員会
			那須塩原市子ども未来部養成研修	講師	那須塩原市子ども未来部
			日本子育てアドバイザー養成研修	講師	日本子育てアドバイザー協会
			宇都宮市民大学	講師	宇都宮市
			人間関係HRST研究会	会長	
			日本人間関係学会	理事	日本人間関係学会
			日本人間関係学会「人間関係士」資格委員会	委員長	日本人間関係学会
			栃木県家庭教育オピニオンリーダー研修	講師	栃木県総合教育センター 生涯学習部
			茨城県市町村家庭教育支援担当者研修・訪問型家庭教育支援員研修	講師	茨城県教育委員会・教育庁 総務企画部生涯学習課
			小山市親学習プログラムファシリテーター対象研修	講師	小山市教育委員会・生涯学習 文化課
子ども生活学科	教授	田渕 光与	壬生町職員（園長・施設長・保育士）研修	講師	壬生町住民福祉部こども未来課
			保育テクニカル研修	講師	栃木県幼稚園連合会
子ども生活学科	教授	田渕 光与	那須塩原市男女共同参画審議会「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	委員 講師	那須塩原市 栃木県教育委員会

			芳賀町幼保小連携推進研修会 茂木町幼保小連携協議会研修会 栃木県幼稚園連合会資質向上研修（ECEQ） 家庭生活支援員養成講座 那須塩原市男女共同参画審議会 真岡市幼小連携研修会 那須町幼保小連携研修会 宇都宮市幼稚園連合会研修	講師 講師 講師 講師 委員 講師 講師 講師	芳賀町教育委員会 茂木町教育委員会 栃木県幼稚園連合会 栃木県ひとり親家庭福祉連 合会 那須塩原市 真岡市教育委員会 那須町教育委員会 宇都宮市幼稚園連合会
子ども生 活学科	教授	蟹江 教子	宇都宮市男女共同参画審議会 栃木県独立行政法人高齢・障害・ 求職者雇用支援機構 運営協議会 栃木県職業能力開発審議会 栃木県男女共同参画審議会 那須町男女共同参画審議会 栃木県次期プラン策定懇談会	委員 委員 委員 委員 委員 委員	宇都宮市 独立行政法人高齢・障害・ 求職者雇用支援機構 栃木県 栃木県 那須町 栃木県
子ども生 活学科	教授	月橋 春美	栃木県キャンプ協会 栃木県レクリエーション協会 宇都宮市冒険活動運営協議会 幼児期からの運動遊び普及検討 委員会 「運動遊びの出前講座」 「幼児期の運動遊び指導者研修会」 「親子で運動遊び教室」 「運動遊び体験指導者派遣事業」	理事 理事 委員 委員 講師 講師 講師 講師	栃木県キャンプ協会 栃木県レクリエーション協会 宇都宮市 栃木県教員委員会 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会 鹿沼市教育委員会 那須町教育委員会
子ども生 活学科	教授	市川 舞	宇都宮市都市計画審議会 芳賀地区研修委員会研修会 栃木県幼稚園連合会教育研究大会 鹿沼市子ども・子育て会議	委員 講師 講師 委員長	宇都宮市 芳賀地区幼稚園連合会 栃木県幼稚園連合会 鹿沼市
子ども生 活学科	准教授	星 順子	鹿沼市子ども・子育て会議 鹿沼市こども未来部保育課研修会 青年海外協力隊とちぎ応援団	委員長 講師 理事	鹿沼市 鹿沼市 青年海外協力隊とちぎ応援団
子ども生 活学科	准教授	石本 真紀	特定非営利活動法人青少年の自 立を支える会 栃木県要保護児童対策地域協議 会調整機関調整担当者研修兼児 童福祉司任用講習会及び任用前 講習会 家庭教育・子育て支援課題解決 セミナー 栃木県スクールソーシャルワー カー活用事業 スクールソーシャルワーカー養 成研修会 那須地区県市町SSW連絡会	理事 講師 講師 スーパー バイザー 講師 講師	特定非営利活動法人 青少年の自立を支える会 栃木県中央児童相談所 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会那須教育 事務所

			栃木県社会福祉士会スクール ソーシャルワーク委員会	委員	栃木県社会福祉士会
子ども生 活学科	准教授	大島美知恵	日本音楽療法学会関東支部 日本音楽療法学会選挙管理委員会 リトミック研究センタ第一支 局・第二支局 宇都宮市保健福祉総務課 富屋地区市民センター 「子育て講演会」 那須塩原市市民大学講座 宇都宮市民大学講座 「親子リトミック教室」 キャリア形成支援事業 青葉会職員研修	事務局長 委員 指導スタッフ 講師 講師 講師 講師 講師	日本音楽療法学会関東支部 日本音楽療法学会 リトミック研究センター第 一支局・第二支局 宇都宮市保健福祉部 那須塩原市教育委員会 宇都宮市 宇都宮市スポーツ振興財団 栃木県立矢板高等学校 青葉会
子ども生 活学科	准教授	松岡 展世	栃木県連合教育会不登校セミナー 宇都宮市姿川地区市民センター 親子ふれあい広場	講師 講師	栃木県連合教育会 宇都宮市
子ども生 活学科	准教授	新井 祐子	東京藝術大学同声会栃木県支部 佐野クラシックコンサート 栃木県幼稚園連合会保育テクニ カル研修 那須塩原市市民大学講座 宇都宮市民大学講座 栃木県幼稚園連合会教育研究大会	会計監査 実行委員 講師 講師 講師 講師	東京藝術大学同声会栃木県 支部 佐野クラシックコンサート 栃木県幼稚園連合会 那須塩原市教育委員会 宇都宮市 栃木県幼稚園連合会
子ども生 活学科	専任講師	阿部 巧	特設授業「英語の勉強について 考える」 提案授業小学校外国語活動 “What's this?” 提案授業 中学校外国語科 「スピーキングとライティング の関連を生かした指導」 情報提供「Can-Doリストの活用 について」 外国語教育推進に係る助言	講師 講師 講師 協力者 協力者	伊達市立大滝徳舜誓学校 伊達市立大滝徳舜誓学校 伊達市立大滝徳舜誓学校 北海道教育大学附属旭川小 学校 苫小牧市立緑小学校
子ども生 活学科	専任講師	霜触 智紀	幼児期の運動遊び指導者指導者 研修会 運動遊び体験指導者派遣事業 運動遊び教室 親子運動遊び研修会 ふれあい運動遊び研修会 第78回全国レクリエーション大会 宇都宮市民大学講座 スポーツクラブセミナー 「幼児期からの運動習慣形成プ ロジェクト」	講師 講師 講師 講師 講師 実行委員 講師 講師 協力	鹿沼市教育委員会 鹿沼市教育委員会 那須町教育委員会 茂木町教育委員会 全国レクリエーション協会 宇都宮市 栃木県スポーツ協会 栃木県教育委員会
子ども生 活学科	専任講師	小野 貴之	「科学する心を育てる」サークル エネモリ	会員	公益財団法人ソニー教育財団

Ⅲ. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程

(設置)

第1条 宇都宮共和大学内に宇都宮共和大学子育て支援研究センター（以下、「研究センター」という）を置く。

(目的)

第2条 研究センターは保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした学際的、実証的な調査・研究を行うとともに、地域福祉の向上に資する政策提言を行う。

2 前項の調査・研究の推進によりわが国の保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした理論、政策の発展・向上に貢献するとともに、その成果を本学の教育内容に反映させることにより、本学の教育の充実、高度化を図る。

3 研究成果を地域社会に還元するとともに、地域社会との積極的な交流を図ることにより、地域福祉の向上に貢献する。

(事業)

第3条 研究センターは第2条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業をおこなう。

- 一 保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした自主研究、共同研究
- 二 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる受託調査・研究
- 三 保育・幼児教育・子育て支援関連資料、データの収集、整備
- 四 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言
- 五 保育・幼児教育・子育て支援の人材育成を目的としたセミナー、講座等の開講
- 六 講演会、シンポジウム、公開講座、研究会等の開催
- 七 経営等診断、研修、コンサルティング活動
- 八 大学、研究機関、企業、行政等との交流、連携活動
- 九 研究年報、研究レポート、A研究成果等の発刊
- 十 その他第2条の目的達成のために必要な事業

2 前項に規定する自主研究、共同研究及び受託調査・研究は、次の各号に定めるところによる。

- 一 自主研究 当該研究に携わる研究者の過半数を研究員が占める研究で研究センターの研究費を用いて実施する研究
- 二 共同研究 研究費の全部または一部を研究センター以外の諸組織、機関等の研究助成を受けて実施する研究
- 三 受託調査・研究 研究センター以外の諸組織、機関からの委託等を受けて行う調査・研究

(組織)

第4条 研究センターは、子育て支援研究センター長（以下、「センター長」という。）及び教授会から選出された研究員並びに本学学長（以下、「学長」という）が任命する事務職員によって組織する。ただし、事務職員は必要に応じて置くものとする。

2 センター長は、本学専任教員の中から、学長が任命する。ただし、学長が必要と認める場合は、本学専任教員以外の者を任命することができる。

3 研究センターに、副センター長及び運営委員長を置く。副センター長及び運営委員長は、研究員の中から学長が任命する。ただし、副センター長は置かないことができる。

- 4 センター長、副センター長、運営委員長及び研究員の任期は2年（年度基準）とし、再任は妨げない。
- 5 学長、副学長および学部長は、研究センターの事業に関し、指導、助言を行うことができる。
- 6 研究センターにおける研究に必要な場合、専任教員以外の研究者を客員研究員として研究に参加させることができる。客員研究員は、センター長が任命し、任期は対象となった研究等の完了時を上限とする。
- 7 研究センターの発展のため、学外の研究者、経営者等に名誉顧問、研究顧問を委嘱することができる。名誉顧問、研究顧問の委嘱は学長が行い、任期は2年とし、再任は妨げない。
- 8 前項の顧問は研究センター長の求めに応じて、研究センターの事業に関し助言、指導等を行う。

（運営）

第5条 センター長は研究センターを統括し、副センター長はこれを補佐する。

- 2 研究センターを運営し、諸事業を遂行するため、運営委員会を置く。運営委員会は運営委員長が主宰し、運営委員長が指名する数名の研究員を運営委員とする。運営委員長は運営委員の中から、必要に応じて副運営委員長を指名することができる。
- 3 研究センターの事業や活動を検討するため、全研究員参加の研究員会議を必要に応じて開催することができる。研究員会議はセンター長が召集し、主宰する。

（運営委員会の業務）

第6条 運営委員会は、研究センターの円滑な運営を図るため、次の業務を行う。

- 一 各年度の事業計画の策定及び予算原案の作成
- 二 研究員から提出される自主研究、共同研究及び受託調査・研究の企画書、予算案査定
- 三 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言の検討
- 四 第3条第1項第五号から七号までに掲げる事業の企画、運営、実施
- 五 研究年報、研究レポート、研究成果等の刊行、発表
- 六 研究センターの施設・設備、資料等の整備及び管理
- 七 その他研究センター運営に必要な業務

（予算及び会計処理）

第7条 研究センターの予算は次の収入による。

- 一 各年度の本学予算に定められた研究センター経費
- 二 第3条に定められた受託調査・研究等の諸事業による収入
- 三 寄付金
- 四 その他の収入

- 2 受託調査・研究等に関する予算配分・原稿料等の基準については別に定める細則によるものとする。

第8条 予算執行にかかわる会計処理は本学の同規程を準用する。ただし、出張旅費等については、名誉顧問、研究顧問及び客員研究員にも適用されるものとする。

附 則

この規程は平成31年4月1日から施行する。

IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領

(趣旨)

第1条 この要領は、宇都宮共和大学都市経済研究センター規程第5条2及び子育て支援研究センター規程第5条2における客員研究員の取扱い等に関し、必要な事項について定めるものとする。

(称号の付与)

第2条 宇都宮共和大学都市経済研究センター及び子育て支援研究センター（以下「センター」という。）は、優れた知識、技術及び経験を有し、本学の研究・教育の充実発展に資すると認められる者に客員研究員の称号を付与することができる。

(指名)

第3条 客員研究員は、センター長が指名し、教授会に報告するものとする。

(付与期間)

第4条 客員研究員の称号は、年度ごとに付与する。ただし、年度途中の場合は、当該年度内の付与とする。

2 客員研究員の称号の付与期間は1年とし、再任を妨げない。

(施設の利用)

第5条 客員研究員は、学長の許可を受けて本学の施設等を利用することができる。

(遵守事項)

第6条 客員研究員が、本学において研究・教育に従事する場合は、本学の諸規則等を遵守するものとする。

2 客員研究員が、故意又は重大な過失によって本学に損害が生じたときは、客員研究員はその責めを負うものとする。

(謝金)

第7条 本学は、必要と認める場合、客員研究員に謝金を支給することができる。

2 前項に規定する謝金については、別に定める。

(交通費)

第8条 本学の依頼に基づき出張する場合は、交通費の全部又は一部を支給することができるものとする。

(称号の取消)

第9条 客員研究員が、本学の名誉を著しく傷つける行為をした場合は、センター長は客員研究員の称号を取り消すことができるものとする。この場合、教授会に報告するものとする。

(雑則)

第10条 この要領に定めるもののほか、客員研究員の取扱いに関し必要な事項は、センター長が別に定めるものとする。

附 則

この要領は、平成25年11月1日から施行する。

子育て支援研究センター運営委員会（2025年度）

センター長 田渕光与
運営委員長 石本真紀
運営委員 杉本太平 星順子 大島美知恵 松岡展世 小野貴之
客員研究員 高柳恭子 土沢薫 田所順子
名誉センター長 牧野カツコ

第16号編集担当 小野貴之

表紙デザイン 近江智子

研究センター年報 第16号

発行日	2026年3月31日
編集・発行	宇都宮共和大学子育て支援研究センター 〒321-0346 宇都宮市下荒針町長坂3829 TEL 028-649-0511(代) FAX 028-649-0660 e-mail : kosodate@kyowa-u.ac.jp Website : http://www.kyowa-u.ac.jp
印刷	株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
定価	1,000円（消費税込み）

